



【コメンテーター】

水上 優 氏（前掲）

榊田 倫之 氏（前掲）

【司 会】

須賀 英之（宇都宮共和大学 学長・宇都宮まちづくり推進機構 理事長）

5. 主 催 宇都宮共和大学都市経済研究センター  
共 催 宇都宮まちづくり推進機構・宇都宮市創造都市研究センター  
後 援 栃木県・宇都宮市・栃木県経済同友会・宇都宮商工会議所・栃木県まちなか元気  
会議・大学コンソーシアムとちぎ・宇都宮観光コンベンション協会・栃木県宅地  
建物取引業協会・宇都宮市大谷石文化推進協議会・下野新聞社・とちぎテレビ・  
栃木放送・エフエム栃木

■司会

開催に当たり、主催者を代表して、宇都宮共和大学学長・宇都宮まちづくり推進機構理事長、須賀英之よりご挨拶を申し上げます。

■須賀



皆さま、こんにちは。宇都宮共和大学のシティライフ学部シンポジウムによるこそお越しくございました。本日のテーマは「『大谷石文化』の魅力発信を考える－フランク・ロイド・ライトがとちぎに残したもの－」です。資料3に先生方のプロフィールが載っています。まず基調講演を建築史家の水上優先生、建築家の榊田倫之先生にお願いします。

パネルディスカッションは、お二人に加えてデザイン史家の橋本優子先生、栃木県文化協会の中津正修先生、宇都宮大学名誉教授の三橋伸夫先生にお願いします。

資料9は、栃木県が「文化と知の創造拠点」として、県体育館跡地に、他では例を見ない美術館・図書館・文書館の一体的な整備についてです。早ければ7年後の完成となりますが、県の中核的な文化施設に、ライトが広めた大谷石の建築文化を世界や全国に発信する、そのような展示館ができればという思いから、このシンポジウムを企画しました。

ご講演の中で、ライトの大谷石への取り組みや、また、そのお弟子さんたちの建築家が栃木県に残した足跡をたどり、日本遺産の大谷石文化の素晴らしさを改めてご理解いただき、栃木県の文化振興に、ぜひそれぞれのお立場でお力添えいただければ幸いです。

開催に当たりご協力いただいた栃木県・宇都宮市・宇都宮商工会議所・栃木県経済同友会をはじめ、多くの関係機関の皆さまにも感謝を申し上げます。本日はどうぞよろしくお願い致します。

## ■司会

ありがとうございました。それでは基調講演をお願いします。兵庫県立大学環境人間学部教授、建築史家の水上優さんです。水上さまから、「フランク・ロイド・ライトーライトが大谷石に見ていたものー」と題して講演いただきます。それでは、よろしくをお願いします。

## 基調講演

# 「フランク・ロイド・ライトと日本 ーライトが大谷石に見ていたものー」



兵庫県立大学 環境人間学部 教授・建築史家

みずかみ ゆたか  
水上 優 氏

兵庫県立大学の環境人間学部の水上と申します。今日は「ライトがとちぎに残したもの」というテーマの中で、私からは、ライトと日本のつながりをざっと概観して、その後、ライトの思想の中で、大谷石がどのようなものとして捉えられていたのかということについてお話ししたいと思います。よろしくお願いします。

まず自己紹介させていただきますと、私の研究領域は、広くは建築史や建築論となるのですが、そのなかでも特にフランク・ロイド・ライトのことをずっと研究しています。もう30年ぐらいになります。これは出版された博士論文ですけれども、他にライトのガイドブックの翻訳や、つい最近では東京と豊田市と青森市で開催されたライトの展覧会の日本側の監修等もしています。これは青森展のフライヤーです。こちらからは東京が近いですので、もしかしたらご覧になった方もおられるかもしれません。図録等も監修、執筆しました。

さて、今日はライトの研究者として、3つの観点からお話ししたいと思っています。まず、ライトは7回来日したのですが、その来日の概要です。それから、日本でどのようなものを造ったのか、皆さんもよくご存じの帝国ホテルがありますが、それ以外にどのようなものを設計し、あるいは計画していたのかということ概観します。そして最後に、ライトの思想を少しひもときながら、その中で大谷石がどのようなものとしてライトに見られているのだろうかということについて、考えてみたいと思います。

### 【7度の来日】

これはライトの年表ですが、簡単にいうとライトの生涯は、建築家のキャリアとしては大きく3期に分けて語られます。ご存知の方も多いと思いますが、1910年までの第1黄金時代、この時代は「プレイリーハウス」という住宅をたくさん設計していた時代です。それから第2黄金時代、これは非常に有名な落水荘、カウフマン邸がありますが、そこからスタートしたと捉えられています。この時は、アメリカの中産階級へ向けた簡素でクオリティの高い「ユーソニアンハウス」という住宅を造っていました。この第1黄金時代と第2黄金時代には、実施作品が100件、200件とあるのですが、これに挟まれた期間というのが、実施作品が極端に少なく、いろいろ呼び方

はあるのですが、「失われた時代」、「苦難の時代」などと称される時代です。ライトは基本的にこの時期に日本にやって来て、いろいろな仕事をしてきたという枠組みです。

ライトは何度も、計7回来日したのですが、初来日は1905年です。この時ライトはカメラを携帯していて、後年そのネガが発見されました。そこに写っている場所がどこなのかと、同定の研究もされてきました。これは出発時のバンクーバー港の写真です。エンプレス・オブ・チャイナという船に乗って初めて日本にやって来ました。

今でこそ飛行機で十数時間もあればアメリカに行けますけれども、この当時はまだ片道20日以上かかった船旅であったわけです。それで7回も来たということで、仕事ということもあるのですが、ライト自身日本がとても好きでありました。アルバムの中から幾つか紹介します。これは名古屋の東本願寺名古屋別院です。今から120年ぐらい前になりますけれども、着物などを見ると時代の雰囲気が伝わって参ります。

これは京都の知恩院経蔵の写真ですけれども、このアングルが日本の浮世絵の構図を思い起こさせます。ご存知の方も多いと思いますが、ライトは自ら、日本の浮世絵から非常に影響を受けたと言っているわけですが、こういうところにもそれが感じられます。

兵庫大仏、今は同じものはないですが、兵庫に来て、そして岡山の後樂園に行き、その後屋島に行っています。ルートはこのような感じで、横浜から入って、名古屋と関西を経て高松まで行って、その後関東に戻って日光にも行っています。日光の写真としては、華厳滝や裏見滝などがあるのですが、非常によく撮れています。これは研究者が指摘したのですが、実は絵はがきを写したものでした。

初来日時は、最初の奥さんであるキャサリン・トビンと一緒にでしたが、実は裏がありました。この時、既に不倫相手のメイマー・ボスウィック・チェニーと怪しい関係になりつつあったようで、それを察知したライトの初期の住宅のお施主さんであるウィリッツ夫妻が、いわば不倫を止めさせるために、ライト夫妻を旅行に誘ったといわれています。

1913年の2度目の来日時には、その不倫相手のチェニーと一緒にしました。先ほど申し上げたように1910年に第1黄金時代が終わっていますが、その理由がこの不倫関係です。チェニーはライトのお施主さんの奥さんであったのですが、2人は恋に落ちて、1909年に一緒にヨーロッパ旅行に出てしまいます。当時の保守的なアメリカの中西部の文化からすると、非常にけしからんということで、社会的に排除されたような状況でした。そんな中で日本に来たのです。表向きの用事としては浮世絵の買い付けなどもやっていましたが、東京で林愛作と帝国ホテルの打ち合わせもしたと考えられています。

この後1914年にアメリカに帰国してすぐ、使用人によってタリアセンが放火され、メイマーを含む7名が惨殺されるという痛ましい事件が起こります。ただ、当時の市民たちはそれを神罰が降ったものとしてライトに対するバッシングをさらに強めたので、ライトは非常に苦しい状況にあったわけです。そうした中で1916年3月、林愛作がアメリカに渡ってライトと正式に帝国ホテルの契約を結び、1917年1月に、ライト3度目の来日となります。その時に林愛作を通して紹介されたのが遠藤新です。遠藤新はここでライトに心酔して、次のライト帰国時に帯同して

渡米し、タリアセンで修行します。そして再度連れ立って日本に戻り、ライトの右腕として活躍することになります。

遠藤新の代表的な作品として旧甲子園ホテルがあります。帝国ホテルを去った林愛作は、関西方面で、西の帝国ホテルと謳ってこのホテルを開業するのですが、その建物を遠藤新が設計しました。現在は武庫川女子大学の甲子園会館として、建築教育の場所として使われています。それから、真岡市の久保講堂です。宇都宮の近隣にも遠藤新の作品がありますね。

それから、4度目の来日時は同伴女性がまた変わるのですが、ミリアム・ノエルと一緒にでした。最初の妻キャサリンとの離婚が成立しなかったために、メイマーとは結婚できませんでした。離婚成立後に出会ったミリアム・ノエルとは結婚しています。この来日から帝国ホテルが着工するわけです。最初にできたのが、この現場事務所でした。ホテルの建物は動力棟から着工するのですが、その後、すぐライトは一度帰ります。

5度目の来日は1919年の年末12月24日でしたが、その直後の27日、既存の帝国ホテル別館が火事で失われます。手狭になった初代帝国ホテルの隣には、すでに別館が建っていたのです。これが焼失してしまったので、来日直後のライトに、すぐに代替建物のデザインを依頼して、アネックスという新別館が3カ月ぐらいで竣工します。さらに1922年4月16日、工事をしていたスタッフのタバコの不始末で初代の帝国ホテルまでも焼けてしまいます。新たな帝国ホテルの工期は大幅に延びて、予算も大きくオーバーして、そういう苦しい状況の中で、初代帝国ホテルの建物が焼け、さらにこのとき死者も出たということで、林愛作はクビになります。

ライトを支えたのは、その時はもう林愛作だけのような状況だったので、ライトも、形的には自ら退いたのですが、ほぼクビです。クビになって、7月22日にアメリカに帰国して、帝国ホテルがグランドオープンした1923年の9月1日の時には、ライトはもう既に日本にいませんでした。その時に、有名なエピソードになりますが、関東大震災が襲ってくることになります。

5度目の来日時に話を戻しますと、このときミリアム・ノエルと一緒に、アメリカでライトのところに入っていたアントニン・レーモンドを日本に連れてきて仕事をさせます。レーモンドは帝国ホテルのパスを描いたりしています。ただ、途中でレーモンドはライトと別れ、日本に自分の事務所を構えて独立します。

レーモンドは、この東京女子大学本館の時ぐらいまでは、まだライトのデザインの影響が非常に強いわけですが、この影響の払拭が、ある意味でこの後のデザイン的なテーマとなります。日光にある、イタリア大使館の別荘の本邸は、そのような背景から生まれたのです。

レーモンドは前川國男等も育てた日本の建築界の功労者でもあります。ライトの縁で日本に来たレーモンドや、ライトの弟子となった遠藤新という建築家が、この宇都宮の周辺にも代表的な作品を残しています。

## 【日本のライト作品】

来日の状況をざっとご説明しました。ここから日本のライト作品を紹介していきたいと思うのですが、赤字で書いてあるところが日本で竣工した建物で、青字で書いてあるものが、2019年

に世界遺産になった8件のライトの建物です。実は2016年に10件でエントリーしていたのですが、うまくいなくて、最終的に3年後に8件に減らす形で世界遺産に登録されました。

ここにある建物がユニティ・テンプル、ロビー邸、それからライトの住宅兼設計事務所タリアセン。このホリホックハウスは日本の芦屋にあるヨドコウ迎賓館・旧山邑邸と同時期のもので、デザイン的にも非常に共通するものがあります。それから落水荘。それから最初に実現したユーソニアンハウスであるジェイコブス邸。砂漠の中のもう1つのタリアセン、タリアセン・ウエスト。それからニューヨークの、ほぼ遺作となるグッゲンハイム美術館。これらの8つの建物がまとめて世界遺産に登録されています。ただ、これらは全てアメリカ国内の建物です。現状のライトの世界遺産の中にはライトと日本の強い繋がりを示す構成要素がまだありません。

日本の作品の位置付けを、数的な視点で、ライトの全作品の中で見てみましょう。ライトの生涯の設計作品というのは計画案も含めて1,100件以上あるといわれています。そのうち米国外のものは1,100件のうちの48件しかありません。パーセンテージでいうと4.2%です。建設されたものは全530件ありますが、このうち米国外には10件しかないのです。現存するものは430件あります。ちなみに私はこの全体の4分の3に現地訪問し、内部に入ったものは全体の約半数です。この現存する430件のうち、米国外のものはわずかに5件しかありません。視点を変えて日本にはということになると、アメリカ以外の48件中、16件設計実績があつて、建設されたもの10件のうち、8件は日本、それ以外はカナダに2件あるだけです。現存するものとなると、全5件中1件はカナダ、のこりの4件は日本です。カナダにあるのは1902年にできたピッキン邸という初期の住宅ですけれども、それ以外は全て日本にあるということです。ライトの全業績における日本の業績が特筆すべきものであることがお分かりになると思います。

アメリカにあるライトの文書館、アーカイヴズでは、日本での作品が15件登録されています。このアーカイヴズに入っていないものが1件あるので、日本では全部で16件の建築の設計があるということになります。以下紹介していきたいと思います。

これは帝国ホテルの新本館の初期案です。1913年に来日した時に林愛作と、多分この辺りをベースにして検討しただろうといわれるものです。断面も少し比較してみたいと思いますけれども、このピーコックルーム辺りは、最終案より小規模になっています。ただ、全体的な構成というか、中央にメインの建物があつて、それが北側と南側の客室棟をつないでいるという構成は踏襲されます。

これはアメリカ大使館案ですが、アメリカ側がライトに設計の依頼した事実はありません。ライトが勝手に設計したものです。これは多分、帝国ホテルの設計をする担当者として、大きな建物をどれくらいやったかということが、要するに実績が問われるという時に、ライトは基本的に住宅がメインの建築家ですので、これはある種のデモンストレーションとして設計してみせたものと考えられています。

このプランなのですが、実は以前建設されなかった別の建物のプランと酷似しています。これがそのサクスター・ショウ夫人の住宅案ですが、この中央部分はほぼ全く同じで、その両側にコの字型にウイングを付けた形になっています。実現しなかったものを別の機会に提案することは、

ライトではよくあることです。

それから、これが帝国ホテル支配人の林愛作邸で、日本におけるライトの最初の実現作品ということになります。東京の駒沢に残っています。一般には非公開のままずっと民間企業が所有していたのですが、近年所有権が移行して、この建物がどうなるのか、きちんと保存されるだろうかと心配していたのですが、去年5月の毎日新聞で、保存という大きな流れできているという報道がありまして、大変嬉しくなりました。先に申し上げましたとおり、アメリカ以外で残されているライト作品は5件しかなく、日本にはそれが4件残っているという中での1件、そして日本での最初の建物です。ヨドコウ迎賓館を世界遺産にという声がある中、もしこれを壊してしまったら、世界に対して逆のアピールになってしまうので、非常にありがたいことで、保存活動を支えていきたいと思っていますところでは。

玄関には、友が集うという意味をもつ朋来居という額が掲げられています。林愛作は、日本で最初のゴルフクラブである東京ゴルフ倶楽部をつくった人でもあります。敷地はそのゴルフ場のすぐそばにあって、クラブハウスの役割も兼ねていました。そして、一番よく残っているのが居間の部分です。ここには大谷石が使われている暖炉があります。

これは古い写真なのですが、居間空間は区切られて手前側には天井があるので、当時と現状は若干異なっていたようです。大谷石の間の目地に金泥を塗るというのも非常に面白いところです。帝国ホテルでも同様に金泥が塗られていました。これはここで初めてやったわけではなくて、ニューヨーク州バッファローのダーウィン・マーティン邸という豪邸があるのですが、そこでも煉瓦積みの目地に金泥が塗られています。

日本の建築文化を紹介する有名な文学作品として、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」があります。ここでは、日本の建築の本質的な美しさは、ほの暗さ、あるいはほの明るさにあるということが言われています。障子の紙で拡散した光が、部屋の奥の床の間にまでぼんやり届いて、そこに金色の棗が鈍く光っているという、そういう記述があります。そういうものをライトも意識していたかもしれません。

こういう外観写真も残っています。これは林愛作です。ただ、アメリカのアーカイヴズに残っている林愛作邸というのは全然違うプランで、ほとんど一致するところがありません。これがどういういきさつなのかは、まだ明らかになっていないところです。

初代帝国ホテルが手狭になったということで、林愛作に主導されて、ライトによって新たな帝国ホテルが設計されることになります。最初に建ったのが現場事務所です。ほとんど紹介されていないものですが、日本人建築家がこれを目にして、『単なる現場事務所と思うなかれ、これはなかなかすごいぞ』というようなことを雑誌で言っています。図面はこれ1枚しかありませんが、写真では多分これだと思います。拡大してみると、この窓のデザインは帝国ホテルのアネックスの窓と一緒です。正面の池の場所に建っていました。

次にできたのが、帝国ホテルの動力棟です。現場事務所は壊すことを前提にしていますので、帝国ホテルの建物として最初に着工したのが動力棟ということになります。帝国ホテルは薪や石炭を使わずに、動力のオール電化を打ち出し「電気ホテル」とも謳っていて、動力施設というの

は非常に重要でした。

アーカイヴズには一文字形プランとコの字形プランの2つが残っています。このどちらが建ったのだろうかといいますと、多分これです。こちらが日比谷公園で、皇居も近いわけですが、ここに動力棟があって、コの字形のプランが建ったのだということが分かります。

それから、先ほど申し上げましたが、初代帝国ホテルが手狭になったため当時すでに別館ができておりました。その別館がライト来日直後のタイミングで燃えてしまったので、ライトが大急ぎで設計して、2～3カ月で竣工して運用されたのがこのアネックスです。多分ここが、ライトがいたところになるかと思えます。建設が進んでいくと現場事務所は壊して、この中に事務所を移して仕事をしつつ住んでいました。ここが多分ライトの部屋です。

新帝国ホテル、ライト館です。全体はこのように、北側と南側に客室の一直線の棟があって、その間で、ここが玄関になり、ここがメインの宴会場やバー、劇場がある高層棟、といっても4階ぐらいなのですが、その間を大食堂がつないでいるという構成になっています。プランを見るとこういう形です。

断面を見ると初期案と実施案の違いは明らかです。正面玄関の吹き抜けが非常に伸びやかになっていて、高層棟との間は大食堂ですが、初期案では2層になっています。最上階の大宴会場ピーコックルームも実施案で非常に大きくなっています。大谷石が随所に使われていて、巨大なクジャクのレリーフがあります。梁にはクジャクの絵が描かれています。

帝国ホテルは日本のフラッグシップホテルとして、さまざまな文化的催しを提供しました。ホテル内の結婚式場や、郵便局、アーケードなど、そういうものも帝国ホテルが最初です。これは大食堂です。これは中庭です。ペーブ・ルースや、これはマリリン・モンローですけども、外国からの賓客は基本的に帝国ホテルに泊まるという形で、日本を代表するホテルとしての歴史を重ねてきたわけです。

ただ、地盤である関東ローム層は非常に柔らかく、硬い岩盤ではありません。そこで基礎杭をたくさん打って、その摩擦力で船のように地盤上に浮いたような形で建っています。建物をいくつかのブロックに分けて、その間をエキスパンション・ジョイントでつないでいたのですが、柔らかいとはいえ地盤の状態は一様ではないので、時間の経過による沈下の度合いがブロックごとに変ってしまい、最後は鉛筆がコロコロ転がるほど水平が保てない状況にまでなってきて、1967年に取り壊されました。その後、中央の玄関が明治村に移築されました。全体像は想像するしかありませんが、この部分だけでもライトの空間のクオリティを十分に感じる事ができます。

ライトといえば、帝国ホテルの耐震神話。1923年9月1日のオープニングが関東大震災のその日であったということ、そしてそこで壊れることなく、その後の東京の復興の拠点ともなったということで、非常に名声が高まったわけです。ただ、ライトが日本で設計した建物全てが地震に強かったわけではなくて、実は壊れたものもあります。

これは資生堂の創業者、福原有信の別荘的な自邸で、箱根の強羅にあったのですが、この地は関東大震災の震源に近く、崩壊しました。これは玄関です。プランはこのようになっています。

中央に矩形の中庭がありますが、ライトには珍しいプランです。図面はかなり残っていて、模型などで再現することができると思います。

それから、小田原ホテル。支配人として林愛作を迎えて、小田原の温泉地にリゾートホテルを建設する計画がありました。着工したことはほぼ確実なのですが、竣工せず、いろいろと謎が多い建物です。

それから自由学園。現在は明日館といわれていますけれども、今も東京の目白に建っています。羽仁もと子、吉一夫妻がキリスト教的な考え方の下に、詰め込み型の勉強の場ではなく、女性の自立を目指した女子学校として構想していました。羽仁とライトを媒介したのは遠藤新でした。遠藤新と羽仁は同じキリスト教会に通っていたのです。ライトはこの構想を聞いてすぐに協力を決め、2カ月後には図面を仕上げます。

帝国ホテルの仕事をしているのに、2カ月でこの自由学園の図面を書いたのはなぜでしょうか。実はライトの母方の一族ロイド・ジョーンズ家は地元ウイソコンシン州スプリング・グリーンの実業家で、聖職者、政治家、農場主の他に教育者もいて、ヒルサイド・ホームスクールという、アメリカで初めての共学の寄宿学校を設立していたのです。自分の叔母達と同じ志向に共感したのだと思います。この明日館の図面にはライトと並んで遠藤新の名前が記されています。一緒にやったと書いているのです。

それから、現在のヨドコウ迎賓館である旧山邑邸です。この写真中央にいるのは犬養毅。そして山邑太左衛門、遠藤新、遠藤の横にいる人が犬養毅の弟子的な存在の星島二郎です。この星島二郎は山邑太左衛門の娘の旦那さん、婿なのです。そしてまた、遠藤新が星島二郎の親友なのです。そのような縁があって、この芦屋の住宅とライトがつながっています。ここでも遠藤新はライトと施主をつなぐキーパーソンだったのです。

これは門の写真です。今はほんの一部の痕跡だけ残っています。図面ではここに門があって、そして温室があります。昨年この温室の敷地を発掘調査したところ、一部痕跡が出てきました。これからさらに研究していくことになっています。これはうちのゼミで制作して、昨年度のライトの展覧会で展示された模型で、失われた門と温室も推定復元しています。

それから、新聞に図面が掲載されていて、アメリカのアーカイヴズに入っていないものが、この日比谷三角ビルという建物です。星島二郎が持っていた土地に、帰国直前のライトがスケッチした計画案で、あとは遠藤新に託したと言われています。これを踏まえて遠藤新が実施設計して建設予定だったのですが、関東大震災によってこの計画も立ち消えになりました。

それから劇場の模型。これは京都大学にあるのですが、多分、ライトが武田五一に贈ったものだと思います。これは同時期に設計されたバーズダール邸の劇場に非常に似ています。それから三原邸、これも過去にデザインされた計画案に非常に似たものがあります。これは井上匡四郎子爵邸。計画案でしたが、もし実現していたら日本での住宅としては最大規模のものでした。後年、遠藤新が全く別なプランで、井上匡四郎の家を葉山に建てています。それから東京市長であった後藤新平邸の計画案です。この敷地には後にレーモンドがデザインした後藤新平邸が実現しています。

## 【ライトにとって「大谷石」とは？】

結局、この林愛作邸、それから福原邸、自由学園明日館、ヨドコウ迎賓館・旧山邑邸、そして帝国ホテルというのが日本で竣工した建物ということになります。そのいずれにも共通項としてあるのが「大谷石」ということになります。「ライトにとって大谷石とは？」ということなのですが、まず、ライトはたくさんの言葉を残してしまっていて、私の博士論文は彼言葉に着目し、その繋がりを明らかにしながら、かれの思想を構造化して図式化するものでした。

かれの言葉の中で、キーワードの一つとして、「素材の本性」というのがあります。「the nature of materials」というものです。ライトの建物は非常に素材感が豊かというか、イミテーションのようなものは使わずに、非常に素材の肌理やテクスチャーを表しているものばかりです。

その使われ方を見てみると、ヨドコウ迎賓館・旧山邑邸ではこういう形で、大谷石が地面と一体化したような形で使われています。また外観にも、あるいは内観にも使われて、これは内と外が連続するというライトのコンセプトの表現にもなっています。主張の強い素材が外にも内にも同じように使われていることで、内と外の境界のようなものがぼやけてくるということです。

それから、建設の工程に関しても相当にこだわっています。帝国ホテルの断面図です。柱や梁といった構造体の中にコンクリートが充填されているのですが、鉄筋を組んで、それをレンガの型枠で囲って、その中にコンクリートを流し込んで、それで完成。今で言うところの「打ち込みレンガ」という工法です。これによって建築の材料が「一体化」しているのだと言っています。例えば普通のコンクリートの建物はコンクリートを打った後、型枠を外して、その表面の仕上げをするという形になるのですが、ライトは外から何かを「ひっつける」ということを嫌っています。

ライトは柱と梁が直角にぶつかることにも不満を持っていました。両者の間に斜めの部材を入れているのは、「連続している」という表現なのです。天井を見ると、こういうモールディングがあるのですが、ここでもライトには主張があります。通常このモールディングというのは、天井と壁というように異なる面や材料の接合部、境界線上に付けるものなのです。そうすることで、このモールディングを外せば、両側の材料はつながっておらず縁が切れているので、例えば壁紙が傷んだら、天井紙を傷めることなく壁紙だけ張り替えできる、というような実用性があるわけです。

ところが、ヨドコウ迎賓館の食堂の天井のモールディングはこのようになっています。これはライトいう「連続性」や「一体性」、「continuity / plasticity」という概念とかかわっています。このことについて、ライトは自分の作品を例示しながら語っています。このハント邸とストックマン邸という建物は、プラン、大きさ、時期もほとんど同じです。ハント邸が先にできて、その後ストックマン邸ができたのですが、このコーナー部分のデザインが少し違いますね。ハント邸は1つの面の中で収まっています。ストックマン邸は向こう側に回り込んでいるのです。

この時にライトは、『すごいことを発見した』と言って喜んでいました。これと同じようなことで、面と面がぶつかるのではなくて、つながっているという、それをモールディングによって強調したいのです。これは多分、その「連続性」ということを身振りで示している連続写真なのですが、上の2枚と下の2枚に分かれます。上2枚は、多分「デ・ステイル」グループの建築などを念頭

に置いているのではないかと思います。今の建築家というのは、乗せたりくっつけたりしているという説明です。このような構成は建築を「外から」造っていると批判しているのです。一方下2枚はライトの建築で、「内から外に」こう広がって行くのだ、それがいいということを言っています。内から外へと連続している、ということがとても大事なのです。

ライトは日本の折り紙が大好きで、オリガミ・チェアと名付けた椅子をタリアセン用にデザインしています。折り紙は多種多様なものを表現できますが、開けば全て1枚の紙ですよ。こういうのがライトは大好きです。ライトは、自然では全て「一から多が生まれる」というようなことを言うのですが、そのことと響き合っています。空間的にも常に連続していくということです。

ライトの建物は有機的建築、オーガニック・アーキテクチャーといわれるのですが、その定義のようなものがここに示されています。「有機的なる語は、全体が部分のためにあるごとく、全体に対する部分」、非常に訳しにくいですし、ハイフンですとつながっているのです。端的にいうと、部分と全体が緊密な相関関係にあって、どちらが上、下ということなく、ハイフンによって両者が行ったり来たりする関係が表現されていると思います。

部分というのを例えば人間と捉えて、全体というのを自然と捉えると、人間と自然が一体的になろうとしている。ただし、みんな違ってみんないいではないですが、みんな一つでみんな違うというのがライトの考えている関係なのです。ライトはずっと自然と人間の間をテーマにしています。これは講演録として記録に残る最初の記述で、これは最後です。生涯を通じて、自然を探求するというのがテーマになっているということです。

そういう中で、「素材の本性に出会うとき建築家は初めからやり直さなければならない」という言葉があります。この図式は私の博士論文の最終的な結論になるのですが、自然と人間が分かれている世界、例えば人工と自然といった場合には分かれている、そういう世界の捉え方がひとまずあります。これが②。ライトはそういう世界を別に否定しているわけではなくて、そうでもあるのだけれども、それだけではない、そもそもそうではない、根底に行くところにつながっているのだということです。その時には人間はヒューマンネイチャーになっているし、ネイチャーはネイチャー・オブ・ネイチャーになる、そのところで within、内ということを用います。これが①。

その内から表れた空間のことを、ライトは空間と言わずに、「space within to be lived in」という、非常にもったいぶった言い方、「住まわれる内空間」みたいな言い方をします。それが③。その内からの内空間のようなものが建築の本質で、要するに一体になっているところ①と分かれているところ②を動く、この動きがリアリティーなのだということをライトは言っているわけです。このネイチャーというところにマテリアルということを入れれば、「the nature of materials」ということが、ここ①にあるということが分かるかと思います。

「石の粒子に大地の文法を読み取りなさい」なんていうことを言うわけです。この space within は第3の次元、奥行き次元、意味次元なのだということをいいます。要するに、物がその背後にある意味みたいなことと交歓する、人間と物が語り合う、そういう空間が大事なのだということを行っているわけです。

スクラッチレンガや大谷石がライトの日本での作品において非常に重要視されています。これ

は今朝撮ってきたのですが、立岩神社や岩原神社。こういう、要するに石の向こうに神的なものを見ている、大地的なものを見ているというのが、大谷の文化の中にあるのだと思うのです。こういう立岩神社や岩原神社は、行った時に少しぞくっとします。石の向こうから、なんだかこちらが見られているような気がします。

それがライト建築の重要なところに使われています。特に重要なのは暖炉です。この暖炉の中で火が燃えている時、ライトの考えている空間が立ち現れる瞬間があるのではないかと私は思っています。これは自由学園明日館、暖炉があります。食堂側にもあります。それから、福原邸の図面にも大谷石の暖炉が確認できます。それから、帝国ホテルの貴賓室にもあります。ヨドコウ迎賓館・旧山邑邸には、主寝室にも、食堂にも、応接間にも、この大谷石の暖炉があるのです。

### 【まとめ】

ライトが大谷石に見ていたものというのをまとめたいのですが、ライトは、自然と人間が「区別されながら根源的に一つである」、「一から多が生まれる」ということを言います。そういうことを「有機的な関係」、「部分と全体が不可分に緊密である関係」と捉えて、有機的建築において「現象する」「空間」が、本来的な人間の在り方を気付かせる契機となることを狙っていたということなのです。

「素材」というのは、そのネイチャーの一つとして大きなきっかけになっています。かつ、ライトはその土地の材料を使うことに非常にこだわる人です。落水荘の縦シャフトの岩も周辺の岩棚から取ってきたものですし、ヨドコウ迎賓館では大谷石を砕いて、コンクリートに混ぜて使ったりしています。

結論なのですが、「大谷石」というのは背後に「大地性」や「神性」を感じさせて、視覚的にも、あるいは手触り、触覚的にも、人間に非常に語り掛ける素材なのです。非常に饒舌だと思います。空間というのはフィックスした物として私の外にあるのではなくて、私と物との間で引き起こされる、現象してくる、経験です。日本で産出される素材の中で、かれが狙っている「空間」を立ち現せる、立ち上がらせる、そういう「力」を、この大谷石が一番持っている、ライトは見定めたのではないのでしょうか。ご清聴ありがとうございました。

### ■司会

水上さま、ありがとうございました。続いて新素材研究所所長・建築家・宇都宮市公認大谷石大使、榊田倫之さまです。榊田さまからは「フランク・ロイド・ライトがとちぎに残したもの」と題して講演いただきます。よろしくお願ひします。

宇都宮共和大学シテライフ学部シンポジウム

資料4  
2025.2.7

## フランク・ロイド・ライトと日本

——ライトが大谷石に見ていたもの——

兵庫県立大学  
環境人間学部教授  
水上 優

(001)



フランク・ロイド・ライトの建築思想

著者 著

『フランク・ロイド・ライトの建築思想』  
中央公論美術出版、2013.4

『花鳥美術館vol.59 フランク・ロイド・ライト』  
花鳥美術館、2018.4

『建築ガイドブック フランク・ロイド・ライト』  
丸善、2008.1

FRANK  
LOID  
WRIGHT

『フランク・ロイド・ライト —世界を旅した建築家—』  
鹿島出版会、2023.11

(002)

## フランク・ロイド・ライトと日本

——ライトが大谷石に見ていたもの——

①7度の来日

②日本のライト作品

③ライトにとって大谷石とは？

(003)

### フランク・ロイド・ライト略年表

1867 ウィスコンシン州リッチランドセンターに生まれる  
1888 アトラー・サリヴァン事務所入所  
1893 独立。シカゴ周辺に多くのプレリー・ハウスを設計  
1902 初来日  
1905 ユニティ・テンプル  
1908 ロビー邸  
1909 施主の妻チェニーと共にドイツへ  
1910 アメリカ帰国  
1911 タリアセン(自宅兼事務所)建設  
1914 タリアセン火災  
1917 林愛作邸  
1918 立業の家(バーンズダール邸)  
1920 福原有信邸  
1921 自由学園明日館  
1923 帝国ホテル  
1925 山色太左衛門邸(現ヨドコウ迎賓館)  
1935 落水荘(カウフマン邸)  
1936 ジェイコブス邸 ユーソニアン・ハウス  
1938 タリアセン・ウエスト  
1943 グッゲンハイム美術館  
1959 逝去(91歳)

第1黄金時代

生涯の時代

第2黄金時代

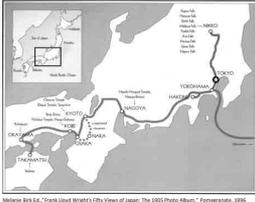
F.E. Querman, "Picturing Wright", Pompano, 1993

(004)

1905 初来日(夫人とウィリッツ夫妻)

2月14日	オークパークを発つ
2月21日	カナダ、バンクーバーから出港(エンプレス・オブ・チャイナ)
3月7日	横浜港着→名古屋、京都、神戸(奈良、大阪)岡山、高松
4月10日	京都
4月21日	東京
4月23日	日光(金谷ホテル)~25日
4月25日	箱根(富士屋ホテル)~27日
4月28日	横浜港出港(エンプレス・オブ・インディア)
5月14日	オークパーク着

キャサリン・トビン (1872-1959)





Memorandum: Frank Lloyd Wright's City Views of Japan: The 1905 Photo Album, Pompano, 1996

(005)

1913 2度目の来日(メイマーと)

1月半ば	アメリカを発つ
2月14日	入国ノボストンを本拠地とする収集家ウィリアム・ジョンのスポーツ・デューリング兄弟の資金(25000ドル)での大量の浮世絵買付けノボストンで帝国ホテルの打合せ
5月17日	帰国
8月15日	タリアセン火災。ジュリアン・カールソンがタリアセンの9人中7人を殺害
12月11日	林夫妻と吉武長一が天洋丸で横浜を出港(林帰国18/4/14、吉武帰国18/4/17)
3月17日	林愛作がタリアセンを訪れ設計依頼、契約
12月28日	バンクーバーからエンプレス・オブ・アジア号で日本へ出港
1917 1月9日	再来日。帝国ホテルの設計を進める→遠藤新、ライトに師事
4月21日	横浜からエンプレス・オブ・アジア号で出港(遠藤新随行渡米)
5月2日	バンクーバー着→5/17タリアセン着

メイマー・チェニー (1869-1914)

林愛作 (1873-1951)

遠藤新 (1889-1951)

(020)

1918 4度目の来日(ミリアム・ノエルと息子ジョンと)

10月30日	日本郵船の伏見丸で出港(遠藤新随行帰国)
11月17日	横浜着→帝国ホテルの現場事務所が建てられる
1919 7月~8月	ライト病気になる
9月	帝国ホテル着工ノ備園
5度目の来日(ミリアム・ノエルとレーモンド夫妻と)	
12月16日	日本郵船の諏訪丸で出港
12月24日	横浜港着
12月27日	既存帝国ホテル別館(1890)消失
1920 4月25日	帝国ホテルアネックス(新別館)竣工
6月下旬	日本出国
7月1日	帰米してLAでバーンズダールと会う
6度目の来日	
12月16日	エンプレス・オブ・アジア号でバンクーバー出港
12月28日	横浜港着
1921 5月後半	帰米してLAでバーンズダールと会う
2度目の来日(ミリアム・ノエルと)	
7月30日	エンパイア・ステート号でサンフランシスコ出港
8月15日	横浜着
1922 4月16日	旧帝国ホテル消失
7月2日	帝国ホテル北棟と中央棟(部分)オープン
7月22日	プレジデント・マッキンリー号で横浜出港→8/1シアトル着
1923 9月1日	帝国ホテルグランドオープンノ関東大震災

ミリアム・ノエル (1869-1930)

アントニン・レーモンド (1888-1976)

(007)

『フランク・ロイド・ライトの20世紀の建築』

THE 20TH-CENTURY ARCHITECTURE OF FRANK LLOYD WRIGHT

Nomination to the World Heritage List by the United States of America (2016 Revised 2019)



・・・全てアメリカ国内の建築作品

(008)

## ライトが手がけた作品の数

生涯の設計 1100件以上 米国外 48件 4.4% 日本 16件  
日本16件、カナダ13件、イラク8件、パナマ3件、イタリヤ、メキシコ各2件  
 エジプト、エルサルバドル、インド、イラン各1件

建設されたもの 約530件 米国外 10件 1.9% 日本 8件  
日本に8件、カナダに2件

現存するもの 約430件 米国外 5件 1.2% 日本 4件  
日本に4件、カナダに1件

(009)

帝国ホテル第1案      アメリカ大使館案      林業作部

新帝国ホテル(ワイド版)      帝国ホテル現場事務所      帝国ホテル動力棟      帝国ホテルアネックス      日比谷三井ビル案

福音堂模型      経世幼稚園端室      自由学園(明日館)      3D-COW遊覧艇・仙山島大木船門部

小田原ホテル案      井上邸(原字子爵邸)      三原野宮邸案      後藤邸(平野野宮邸)

(010)

## 素材の本性 (the nature of materials)

ロビー部 (1910)      ポーゾン邸 (1939) © Pedro E. Guerrero Archives

スローラー部 (1923)      滝水荘 (1935)

(011)

## 連続性／一体性

ユニタリアン・ミーティングハウス (1947-51)

オリガミ・チェア

(012)

## ライトの建築——「有機的建築」

### 「有機的」——とは？

(人間)(自然)  
**部分と全体の緊密な相関関係**

建築における有機的な語は単に内屋に吊してあるもの、2本足で歩きまわるもの、畑で栽培されるものを指すのではない。有機的という語は**実在**を指すゆえに、インテグラルあるいは本質的という語を使う方がよいであろう。建築において**独断的に用いられた有機的な語は、全体が一部分のためにあることと、全体に対する一部分を意味する。それゆえインテグラルなものとしての実在は、有機的な語によって真に意味されるものなのである。本質的な事柄。**

As originally used in architecture, *organic* means *part-to-whole-as-whole-is-to-part*. So *entirely as integral* is what is really meant by the word *organic*. INTRINSIC. [FA321]

(013)

自然は良き教師である。私は自然の子供であり、自然の訓辞を離れて活躍することはできない。(1896)

自然は偉大な教師である——人は自然の教えを受けとめそれに応えることができるのみである。(1954)

私は建築を根から、世界をめぐる旅によって、そして自然の探求における絶え間ない実験と経験によって学んできた。(1957)

### ライトの生涯一貫したテーマ

## 自然-探究 (Nature - study)

(014)

## 素材の本性 (the nature of materials)

この強力な新たな拠所——素材の本性——とは、あらゆる素材において、それに求められている働きに関する共通の核心のことである。これは建築家が全くのはじめから再びはじめなくてはならないということの意味する。 [NH60]

建築は最早象徴的な彫刻ではなく、より偉大な建物に生長する、より素晴らしい財産に生長する、真の文化である。それは素材の本性に真実であり、より人間の本性に同意する。 [MA60]

②: nature materials ——— man : individual, specific, variety

③: space-within-to-be-lived-in : the third dimension, depth-dimension

①: nature of Nature ——— homo-nature : within, one, fundamental  
Nature of Materials

ライトの思索における自然に依る建築のあり方の構造

(015)

石の粒に大地の文法を読みとりなさい。石とは大地を形作る骨格であり、何れもその露出に他ならない。そこに建築家は腰を下ろし、学ぶのだ。 [CW1-275]

(016)

## フランク・ロイド・ライトと日本

### ——ライトが大谷石に見ていたもの——

- ・ ライトは、自然と人間が「区別されつつ一根源的に1つ」であることを「有機的関係」と捉え、「有機的建築」においてたち上がる(現象する)「空間」によって、その関係を支えようとしていた。
  - ・ 素材は、その空間現象の契機である。
  - ・ ライトはその土地固有の素材の使用にこだわっていた。
- 
- ・ 背後に「大地性」や「神性」を感じさせ、視覚的にも触覚的にも人間に働きかけてくる「大谷石」は、日本で産出される素材の中で、ライトの狙う空間現象の契機としての「力」を非常に強く持っている、と見定めたのではないか。

(017)

## 基調講演

# 「フランク・ロイド・ライトが とちぎに残したもの」



(株)新素材研究所 所長・建築家・宇都宮市公認大谷石大使

さかきだ ともゆき  
榊田 倫之 氏

### 【はじめに】

榊田でございます。どうぞよろしく申し上げます。先ほど水上先生から、ダイジェスト的にライトを俯瞰するお話を頂いて、改めてライトの功績を感じたところです。一部重複するところはあるのですが、素材の持つ力、それがどのようにライトの建築に影響していったか、そして、私が実務としてやっている建築に対して、現代建築に対してどのように大谷石が展開されてきたかということについて、少しお話をしてみたいと思っています。

私は新素材研究所という少し風変わりな設計事務所をやっています。後で出てくるのですが、ご縁として、帝国ホテルが京都にできるのですが、私とその設計者に選ばれ、来年の開業に向けて今、設計をやっています。そして、大谷石大使も務めていますので、人生の伏線を回収しているという感覚で、今設計をやっています。

新素材研究というのですが、ある意味では旧素材研究で、日本には古い良きものがたくさん残されていると思うのですが、その一つが大谷石ともいえると思います。私は昨年著書を出し、『素材考』と銘打ったマテリアルの著書なのですが、日本津々浦々、いろいろな石、これは大谷石をはじめ、凝灰岩のみならず、大理石であったり、木であったり、そういった日本の良き素材、あるいは日本の良き技法、そういったことを未来へ残していけないか、高度成長の中で淘汰されてしまった日本の良きものはたくさんあると思いますので、そういったものを再編集して、空間による構成をして、また世の中に問うていきたいということで活動をしています。

そのような中で、素材の探求というのはある種、場所を知っていくことであり、その歴史を知っていくこと、そして、その向こうには自らを知ることということで、ローカリティを追究していった先にグローバリズムがあるのではないかという仮説を立てていて、私自身も日本人の建築家として、日本の素材を探求していくという活動をしています。

### 【大谷石について】

改めて大谷石の魅力とは何なのかということで、先ほどの水上先生の話であったことと、まさに私は日々同じことを思っているのですけれども、改めてこのポーラスさ、野性味のあるという

か、粗野な風情というのが非常に魅力です。近年、やはり建築では、風化していくものを建材として利用するというのはなかなか望まれない部分もあるのですが、大谷石の魅力というのは枯れていく風情、きれいなサビというのですかね、そういったものが一つの魅力ではないかと思っています。

日本の凝灰岩というのは、ご承知のとおり、たくさん採れる、あるいは採れたわけなのですが、特に東のほうの中心に大谷石があり、北は札幌軟石、あるいは白河石、西でいけば竜山石など、非常に魅力的な石が多いと思っています。そして、まさに場所を知るといことで、これは皆さん、大谷石をよくご存じの方がいらっしゃると思うのですが、大谷石というのは露天掘り、まさに山を削っていく掘り方と、地下掘削をして中から、60メートルほど下りて行って、田んぼの中に唐突に現れる地下坑に入っていくと、そこに石丁場があります。

この丁場の中に実際に入っていくと、冷気に包まれて、皆さん、大谷資料館というのを地元で行かれたことがあると思うので、想像がつくと思うのですが、このような石室のような空間で、自然の光が差し込んでいる、これはまさに、建築家としては、いつかこのような空間をつくってみたいと思うぐらいの空間で、こういったところに行くのをいつも楽しみにしています。

石そのものは、このようにくし目を入れて、そして、このようにハンマーでたたいて、石を剥がして採っていくという、掘るというか、剥がすという感覚で採っていきまして、これは五十石材という、大体30センチ、90センチぐらいの規格サイズです。これは地下から持ち上げるために適したサイズということですが、このサイズの石を剥がして出していきます。そして、その表面にはこのような、最初は青みがかった色なのですが、後に酸化して行って、黄色くなっていくということで、この中には有機物が堆積して、半分化石化したようなミソの部分が非常に魅力的で、こういう粗野な風情というのが大谷石の一つの魅力ではないかと思っています。

そして、日々、大谷石とは何なのかということを考えていった中で、私自身が、これを図式化すると、このように読めるのではないかと思っています。「石でもあり、土でもあり、木でもある」というものが、まさに「大谷石」ではないかということです。最初にこれを申し上げたいのですが、日本の文化には陶器や陶芸など、陶器質のもの、そういった土をこねて形態化するようなものや、あるいは、日本の建築は木の文化ですから、そういった、土もそうですけれども、100年、200年と残っていくような、木の枯れたものをめでるとい価値観の中で考えていけば、まさに大谷石というのは日本の風情に合う素材ではないかと思っています。

かつては年間90万トンぐらい産出されたものが、今では2万トンぐらいしか市場に出ないということで、それというのは、まさに建材としての利用が難しいということが評価の中にはあるのですが、私個人としては、建築家として大谷石の啓蒙というのを、これからの設計人生の中で考えていきたいと思っています。

#### 【帝国ホテル日本館・通称「ライト館」】

そして、帝国ホテルのライト館、これは先ほど水上先生の話にもありましたけれども、1923年に竣工して67年まで建っていたということで、年数にしますと44年です。これは意外と短かつ

たと思っています。明治村に移築されたのは1970年代ですので、実質的に今、明治村に建っている時期のほうが長いという状況になっていて、意外と日比谷に建っていた時期は短かったのだなと思うわけなのです。

これが解体直前の67年の帝国ホテルなのですけれども、この時、ちょうど高度成長の中にあつた日本ですので、排ガスが非常に多かったのです。それによってかなり大谷石の風化と、あとは黒ずんだ跡が、解体されると同時に、やはり建材に向かないという意識を与えてしまったという感じがあるのではないかとと思っています。

改めて今、明治村に行った大谷石を見ると、50年以上たっていますけれども、結構きれいなのです。ですので、かなり大谷石の、採れた石の質も違うと思うのですけれども、やはり環境によっても変化の差があるということです。日比谷の帝国ホテルは2036年に新たな建物に変わりますけれども、私個人としては、ライト館のリバイバルができれば面白かったなと思っているのですが、そういう実現にはならないようです。

1921年の完成前に、解雇される前のライトと、左端に遠藤新とライトが写っていて、これは有名な写真なのですけれども、これが、先ほどの古びた大谷石とは異なる風情がカラーであれば見られたということで、想像しながらこれを見ています。そして1923年、これも有名な写真ですけれども、関東大震災の落成年の後に撮られた写真で、右奥に見えているのが、有楽町方面から見た写真なのですけれども、ライト館が残されています。ここで耐震神話というものが生まれているということになります。

これも先ほどあつた写真ではありますけれども、日比谷公園の前に、ちょうど帝国ホテルの左2軒隣に鹿鳴館が、昭和初期に建っていたということもあり、外国の要人、賓客を迎えるための施設として、鹿鳴館とともに帝国ホテルがあつたということが分かると思います。

そして、このような写真です。孔雀の間、こういったレリーフに、これが、先ほど石のようでもあり土のようでもあると申し上げたのは、やはり彫刻しやすいということです。形態を作りやすいところで、このようなレリーフに、特に帝国ホテルでは生かされていったと思っています。

一時期アメリカ軍、GHQに接収されるという時期がありました。今では残念ながら建っていたライト館を体感することは叶いません。教科書や写真でしか見られないというのが非常に悲しいのですけれども、見たかったなと思います。

## 【帝国ホテル京都】

ここまでは皆さんがよく知っている、ある種の史実ということだと思のですが、私が今取り組んでいる帝国ホテル京都ということで、これは新聞発表などもかなりされていますので、ご覧になった方もいると思います。帝国ホテルというのは、先ほどの1期目の帝国ホテルから、ライト館というのは2代目の建物です。その後、今、日比谷に建っている建物が建ってしまつて、あと10年後ぐらいに日比谷の三井不動産の再開発に、巻き込まれているというところなのですが、今の帝国ホテルの大株主は三井不動産ですので、一帯の開発の中で整備されるということになります。建築家は、私は友人ですけれども、田根剛というパリ在住の建築家が建てるということ

発表されています。

ホテルとしては、日比谷と大阪と上高地に3拠点あります。大阪が30年前にできましたので、京都にできる4拠点目というのは30年ぶりの新規開業、帝国ホテルにとっては4拠点目のホテルということになります。われわれが計画している建物というのは、今、これは少し分りにくいのですが、この赤の点線で書かれているところです。この縦の通りが花見小路で、この辺りに八坂神社があって、四条通がこの辺りなのですけれども、建仁寺がこの辺りにあります。

ちょうどその中間ぐらにある、甲部歌舞練場という、芸舞妓さんが訓練をする場所です。技芸学校がある場所なのですけれども、その一部、その敷地の中に、弥栄会館という昭和11年にできた劇場がありまして、これを帝国ホテルにしようという計画になっています。

歌舞練場は、耐震改修が終わりまして、弥栄会館がホテル化されるという計画が始まりました。これが昭和11年当時の竣工当時の写真で、非常に見にくいですが、東山に八坂の塔が見えて、ここにその当時の歌舞練場が見えます。これがちょうど、花見小路から門をくぐって見たところということになります。

様式的には、いわゆる帝冠様式の建物なのですが、コンクリート造の建物に和風の屋根を乗せるという形で構成されたものになります。特にここの唐破風の意匠が特徴的で、これは、京都には金閣・銀閣・飛雲閣という三閣がありまして、西本願寺の中にある、秀吉の聚楽第といわれていた飛雲閣というのがあります。その屋根が、唐破風のモチーフを引用したのではないかとされている建物です。これは国の登録有形文化財にもなっています。

これを一部保存活用してということで、これは南側と西面だけを残すのですけれども、先ほど申し上げた弥栄会館というのは、芸舞妓さんが訓練したものをここで披露する、劇場建築だったのです。

先斗町の歌舞練場と、この弥栄会館というのは、同じ木村得三郎という建築家が建てた建物で、武田五一が監修しています。帝冠様式であり、随所に幾何学的なものを引用して、1936年ですので、ちょうど後期、アールデコといいますか、1932年にインターナショナルスタイルが確立した後ののですが、そういったアールデコの雰囲気を残しながら建てた、非常に魅力的な建物になっています。

劇場ですので、ホテルに改変するというのは非常に難しいということもあり、シルエット保存と呼んでいるのですが、形態だけ西面と南面だけを残して、あとは新築します。この辺りは3階建てぐらいまでしか建たないエリアですので、容積を獲得するという意味もあるのですが、京都市の景観審議会を通して、この形態の中でホテルとして再構成するというプロジェクトです。

内部のインテリアから隅々、客室から、プールから、レストランまで、全部われわれが設計しています。このような新旧の対比をもって、何とか一石を投じたいと思いながら日々、今は毎週のように京都に行っているのですが、今年が工事としては最終局面です。来年の春に開きますので、京都に行かれることがありましたら、ぜひ見ていただきたいと思います。

当然、大谷石も使う予定にしています。レリーフのような使い方にはならないのですが、象徴的なところにはやはり大谷石を活用したいと考えています。帝国ホテルの皆さんとしては、大谷

石に対してある種、前向きな方もいれば、また大谷石かという人もいて、何度も帝国ホテルはライト神話というのがこびりついて、なかなかそこから脱却できないという思いもあり、大谷石を提案した時には、実はさまざまな反応がありました。やはり建築家の私、あるいは大谷石大使をやっている私としては、ここでやはり大谷石の魅力についてもう一度考えて提案をしてみたいということで、一部ですけれども、使うということになっています。

#### 【フランク・ロイド・ライトが日本に残した4つの建築】

ライトが日本に残した4つの建築ということで、先ほども話がありましたけれども、やはり旧林愛作邸ですね。これが最初にできたということで、私はやはり、起点になったこの建物が非常に重要なのではないかと考えています。去年の5月に発表されたということで、水上先生もおっしゃっていましたが、私もかなり危惧していました。住友不動産が買ったというニュースが一時流れたのですが、電通から所有権が移ったということもあり、解体されるのではないかという思いのほうが強かったのですが、何とか保存されるということになりました。これは非常に喜ばしいことだと思っています。

先ほどアーカイブに残されているフロアプランがありましたが、現状はこのようになっています。入り口から、このような大広間になっているところと池がつながっている、いわゆる草原住宅、プレイリーハウスの形式といえると思うのですが、そこに日本間がつながるといって、本当に和洋折衷的なフロアプランになっています。幸運にも、中を見せてもらう機会があり、実際に行ってきた時の写真なのですが、まず柱に、一番お客さまをウェルカムするところに大谷石が使われているところで、床、そして象徴的な柱、ここに大谷石が使われています。

ここで使っている大谷石というのは非常に小さいブロック状のものを使っていて、あまりその後のライトの建築に見られる使い方とは少し違うなという思いもあって見ているのですが、かなり現状は朽ちています。大谷石は、健在であるとはいえないのかもしれませんが、100年以上たっても、大谷石らしさというのはそこにあるというふうに感じました。

池も水が抜かれていて、このようになかなかぼろぼろなのですが、モダニズムの雰囲気というか、こういう水平の屋根と開口部のプロポーション、そして、少しアールデコの要素が窓のサッシの割り付けなどにも反映されていて、非常に近代建築の様式的なところを改めて体現しています。この開口部の在り方と、こういったサブの入り口にも構えとして大谷石が使われているということで、ここでも大谷石が随所に見て取れるということがあります。

先ほど暖炉のお話がありましたが、まさに私も暖炉に火がついているということを感じながらここを見ていまして、金色の目地がまさに自然光でも浮かび上がってくる、体験としては金の目地がかなり、なかなか効いているということがあり、石そのものの存在感をアピールすると同時に、全体感としての光の影響を感じるということが、体感としては非常にあったかなと思っています。外部にも内部にも残されたこの大谷石、非常に魅力的ではないかと思えます。

#### 【特徴と魅力：大谷石を用いた建築物の好例】

大谷石が日本の建築においてどのように展開していったか、私自身が考える建築物の好例をご紹介します。一つは、これは当然かもしれませんが、日本民藝館です。これは柳宗悦が創設した民藝運動の拠点といってもいいと思うのですが、東京の駒場にあるものです。

ここで私が注目したいと思っているのは、腰壁の石の張り方です。これは、やはり西洋的な建築の文脈でいえば、石というのは積むものだと思うのですが、ここで見て取れるのは、腰に縦に張っているという感覚ですので、地面に重いのを置いているというよりも、木造の建築にある種、木の板を張っているような扱いで石を扱っているということです。ここに、なまこ壁といいますが、漆喰を目地に盛り上げて塗っています。この張り方が非常に大谷石らしさを表現していると、私は思っています。

そして、もう一つは屋根です。屋根瓦を大谷石で作るということをやっている、もちろん建築的には構造的に非常に不利な形にはなるのですが、日本国内で屋根に石を使っている建築というのは結構多くあります。代表的なものだと、東京駅の玄昌石や、あとは諏訪にある鉄平など、そういった摂理によって薄くなるものを屋根にふくという形のもの結構多いです。

しかし、大谷石のように彫刻できる、軟らかさがあることによって、形態を作って瓦に見立てて、それを葺いていくということで、それが経年的な風雨によってさらされて、ある種、味がついていくという、この良さは瓦にはない良さです。これが上手く表現されていて、非常に魅力的だと思っています。

もう一つは、これは栃木ですけれども、濱田庄司の益子参考館です。これは民藝運動の代表としての濱田庄司が有名だと思いますけれども、参考館においても、益子自体は工芸的なものが盛んな、藍や陶芸が非常に有名ですけれども、そういった民芸的なものの扱いとしての、それに寄り添う大谷石ということで、この大谷石の魅力がある種、工芸的なものを非常によく見せているのではないかと思います。

そして、文脈的にはひとつ違う方向で、近代建築の延長線上にある大谷石ということなのですが、これは坂倉準三の旧神奈川県立近代美術館です。これは今、鶴岡ミュージアムという名前になっています。コルビュジエの日本人の3人の弟子は、前川國男、坂倉準三、吉阪隆正といいますが、その中の1人である坂倉準三が造った、近代建築の5原則の一つであるピロティで、浮いたこのボリューム、そして内外空間が連動的につながっています。

これは典型的な建物なのですが、ここのピロティ部分に使われている大谷石、回遊できる庭園の中にこれが建っているのですけれども、ピロティ部分に内外の自然環境とつながる大谷石の扱いというのが、非常に日本人が近代建築を扱う上で、テーマとして取り上げたかったのだらうと思われる扱いではないかと見ています。

そして、ここから少し手前みそなのですが、われわれが計画したもので、行かれたことがある方もいらっしゃると思うのですが、小田原文化財団の江之浦測候所です。これは、私と協業している杉本博司という現代美術家がいるのですけれども、杉本博司の財団の施設でもあり、小田原から相模湾に囲まれた、熱海までの間の途中にあるところです。箱根外輪山に囲まれた急峻なミカン畑の土地を利用して、大体1ヘクタールぐらいの土地に建物を建てています。

その中に象徴的な、100メートルギャラリーと呼んでいるのですが、冬至と夏至の朝日の昇る軸線に建築を合わせて、ある種、ランドアートともいえる建物を計画しているのですが、非常に風光明媚な海岸線と、箱根外輪山に囲まれたところに建築を据えるということをやっています。

この100メートルギャラリーの側面、壁に大谷石を使っているということで、実はこれを評価していただいて、大谷石大使を拝命したという経緯があります。2017年に建物が完成し、アート好きな方は、今、直島はかなり人気ですけれども、東京から直島はかなり遠いので、近郊でアート施設に行きたいという、ここに来られる方が多いということで、外国人の来館者が非常に多い施設になっています。周りには何もありませんけれども、ここだけが人がたくさん来てくださっています。

これは外から内部を見た写真ですけれども、内部空間の壁、100メートルギャラリーの壁の部分に大谷石を使っています。建築物の高さとしては大体3メートルぐらいあるのですが、長さが100メートルありますので、連続する人工の大谷石の壁としては、かなり長いほうになるのではないかと思います。

表面の仕上げも、先ほど最初にあった地下の、地面を剥がした側の、何も人工的な処置をせずに肌から外してきた側、肌そのものを、地球側にあった肌をそのまま仕上げとして使っています。あまり、先ほどの坂倉さんの使い方のようなきれいな面ではなくて、割と粗野で力強い使い方、プリミティブな素材の扱いを心掛けてやったものになります。このように相模湾の水平線と建築物の水平線が連続してつながってきて、有機的な箱根外輪山の自然の形態と対比的に水平の線が見えるということで、このビューが一番私としては気に入っています。

こういった、建築物というのは当然、人工的なものなので、その人工物と自然との対比を考えた時に、大谷石の相性というのはすごく中間的な風情を持っていますので、建築の力強さも増すのですが、環境との調和も図ってくれるような魅力がすごくあるのではないかと考えています。一方で、風化していくということにはネガティブな、都市部ではなかなか、そういう難しいというのも当然あるのですが、このような環境の中では、大谷石の扱いというのは非常に魅力を発揮するのではないかと考えています。

### 【カルティエ 時の結晶展】

最後に、現在進行形でも帝国ホテルをはじめ、いろいろなもので大谷石を啓蒙したいと思って、使っています。代表的なところでは、ご存じの方もいらっしゃると思うのですが、2019年に国立新美術館で、フランスのメゾンのカルティエの時の結晶展というのを、われわれが展示空間のデザインをしました。その巡回展として去年、ソウルで展覧会をやりました。ここでも大谷石をかなり使ったということがあります。

場所は東大門広場という、もう亡くなってしまいましたが、ザハ・ハディドという建築家がいきました。この有機的建築の内部に、もう一つわれわれのほうで展示空間としての建築をつくり、その中に、カルティエの宝石を随所に見ていただくという空間をつくりました。当然、われわれは素材の研究をしていますので、石のみならず布や木、ガラスなど、そういったものを多用しな

がら宝石との対比を展開しました。

その中でも一番ハイライトというか、象徴的な展示空間があるのですが、そこでは大谷石と、この粗野な石と、奇跡のような石、エメラルドやルビー、ダイヤモンドなどと、大谷石を対極的に対比させるという見せ方をしました。これは実際に大谷石の石切り場で、カルティエのために石の配列を考えているシーンなのですが、このように展示空間の中に、かなりの量の大谷石を活用して井桁状に組んでいます。

このように、ケースの中に入っているのは当然、高価なものなのですが、その周りに、石室の中で宝石を発見するような、そういった印象が持てるような展示空間をデザインしました。この時にも、光を浴びた石の肌の雰囲気や、エメラルドのきらめきのそばにいる粗野な、野性味のある石との対比。こういったところが非常に魅力的に、双方が浮き立ってくる場所があり、もちろん宝石を見るという展示会なのですが、私としては大谷石を見てほしいということで、東京展でも使いましたけれども、韓国に巡回をしまして、今は次の巡回地を待っています。大谷石を広めたい私としては、この石を広く見ていただける機会をこれからもつくっていきたいと思っています。

#### 【まとめ】

まとめとしては、やはり最初に戻るのですが、研究者ではなく、大谷石を使うという建築家、実務家から見た時の大谷石の魅力というのは、ライトが感じたことともしかしたら同じなのかもしれないのですが、土のようでもあり、木のようでもあるということです。それが広く伝わるのが大谷石の発展につながっていくのではないかと考えています。改めて書きましたけれども、「土のような、木のような大谷石」ということで、これが最も日本らしい石といえるのではないかと考えています。

石の存在感や経年変化、そして木造との親和性、あとは加工しやすいということ、あるいは多孔質な表面が土着性の表現にもなっています。これがある種の特徴になってきて、これがグローバル、ローカルから世界につながっていく一つのヒントが、ここには隠されているのではないかと考えています。少し駆け足になりました、まだ少しあるのですが、以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。

#### ■司会

榊田先生、ありがとうございました。それでは、ここで15分間の休憩に入りたいと思います。





(009)



(010)



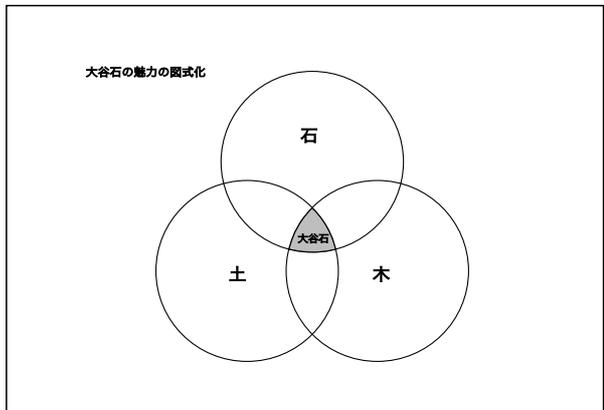
(011)



(012)



(013)



(014)

帝国ホテル旧本館・通称「ライト館」  
1923-1967

(015)



(016)



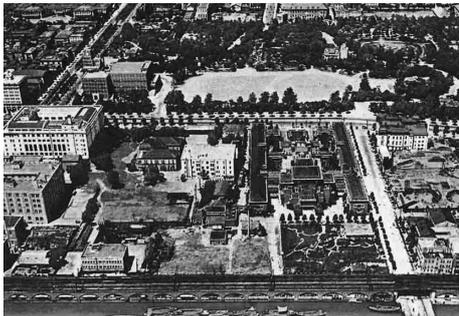
1921年 完成前の「ライト館」と工事関係者

(017)



1923年、落成年、関東大震災直後の有楽町界隈

(018)



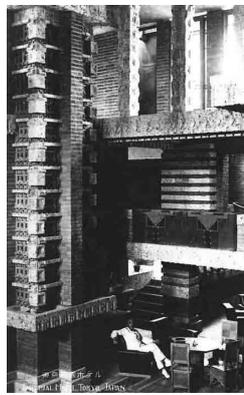
昭和初期の写真：帝国ホテルを取り巻く日比谷界隈の俯瞰

(019)



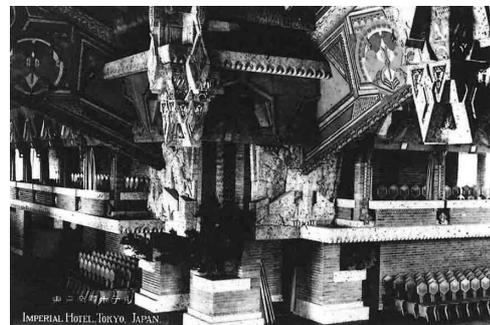
「ライト館」の中庭に面したテラスでくつろぐゲスト

(020)



「ライト館」1階ロビーでくつろぐゲスト

(021)



「ライト館」の孔雀の間

(022)



メインダイニングに集うゲスト

(023)



1945年、終戦後帝国ホテルを接収した米兵

(024)



1959年、ライト館と日比谷一帯

(025)



1967年、解体が進むライト館

(026)

## 帝国ホテル

京都  
Kyoto, Japan  
2026

(027)

## IMPERIAL HOTEL

帝国ホテル

帝国ホテルについて

帝国ホテルは1890(明治23)年、西欧化を進める明治政府の要請に応じ、海外賓客をもてなすための「迎賓館」の役割を担って東京、日比谷の地に開業いたしました。最近にあたっては象徴的な長を齎めた震災後一を以てはめとする経済人たちが設立発起人となり、宮内省や当時の名だたる財閥が出資するなど、まさに政官財が国の威信をかけて誕生したホテルです。



帝国ホテル東京  
(1890年開業)  
697室



帝国ホテル大阪  
(1996年開業)  
381室



上高地帝国ホテル  
(1933年開業)  
74室

(028)

東京航空写真



(029)



(030)



(031)

## フランク・ロイド・ライトが日本に残した4つの建築



日林受作邸 (1917年)



自由学園明日館 (1921年)



帝国ホテルライト館 (1923年)

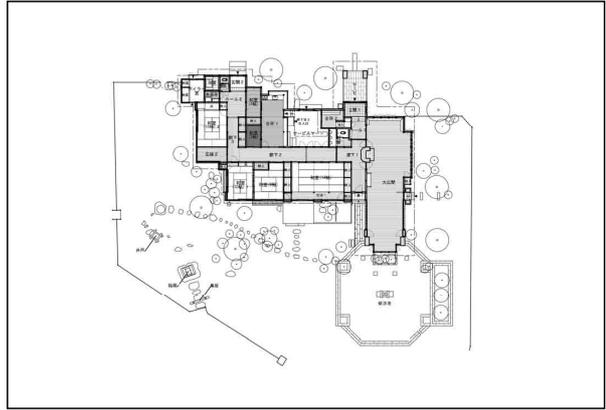


ヨドコウ遊覧館(旧山西家住宅) (1924年)

(032)



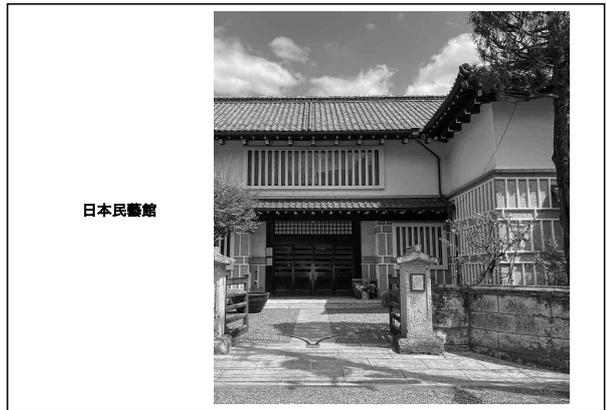
(033)



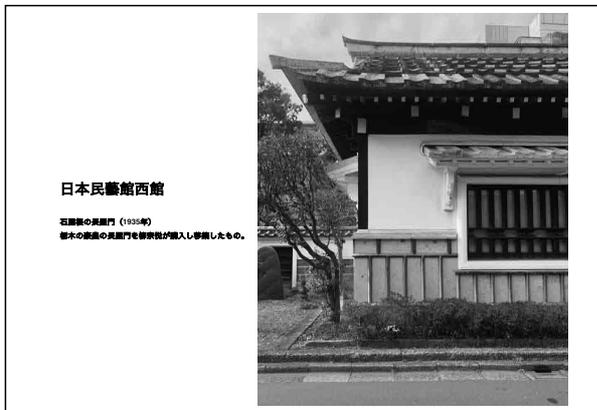
(034)



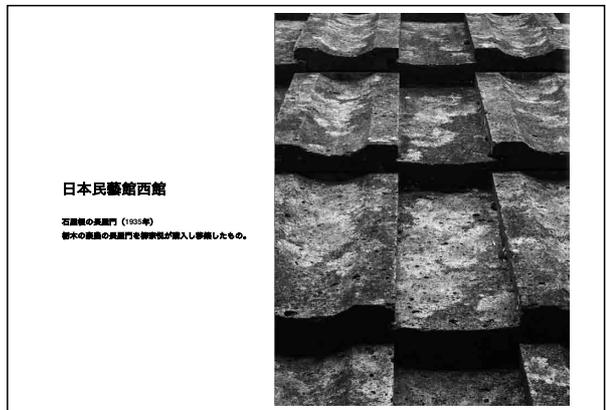
(035)



(036)



(037)



(038)



(039)



(040)



鎌倉文学館 鶴岡ミュージアム (旧神奈川県立近代美術館 鎌倉)

(041)



鎌倉文学館 鶴岡ミュージアム (旧神奈川県立近代美術館 鎌倉)

(042)

小田原文化財団  
江之浦測候所  
Odawara, Japan  
2017

(043)



(044)



(045)



(046)



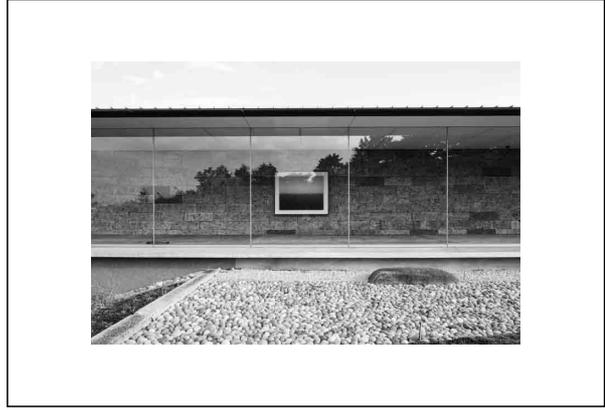
(047)



(048)



(049)



(050)



(051)



(052)



(053)



(054)



(055)



(056)



(057)



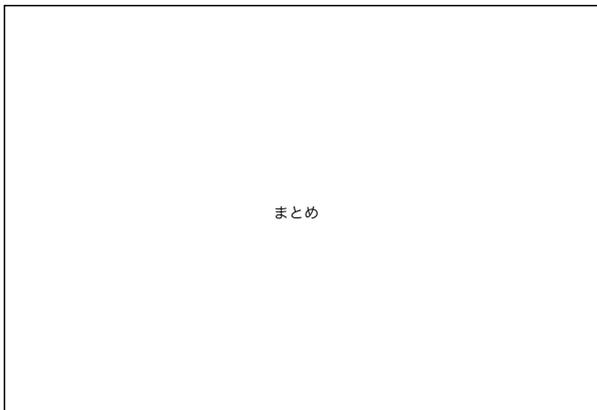
(058)



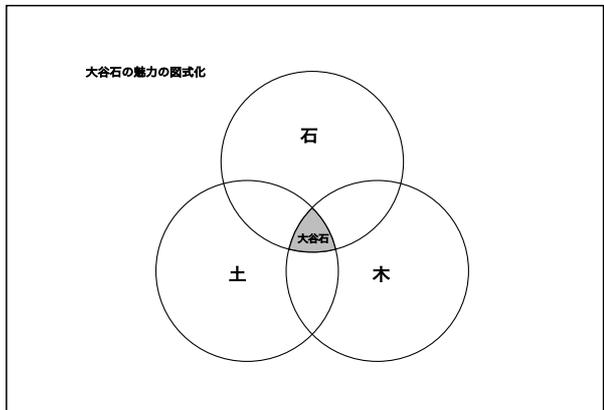
(059)



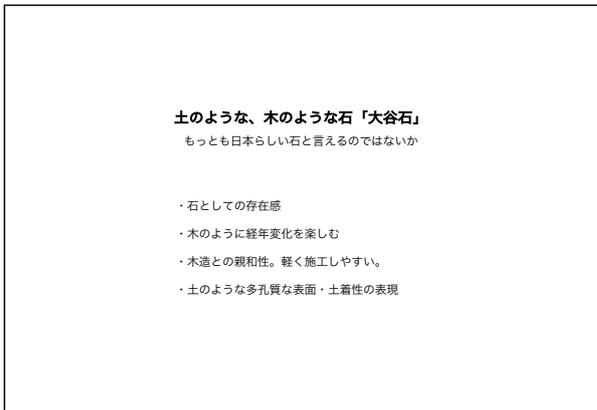
(060)



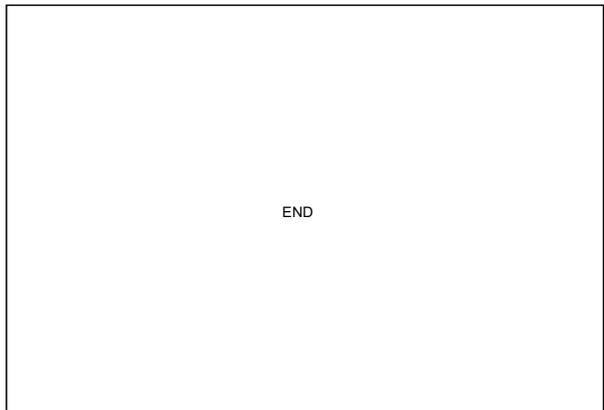
(061)



(062)



(063)



(064)

## パネルディスカッション

# 「大谷石文化の魅力発信を考える」

### パネリスト

橋本 優子 氏 (近代建築・デザイン史家)

中津 正修 氏 (栃木県文化協会 会長)

三橋 伸夫 氏 (宇都宮大学 名誉教授・宇都宮市市政研究センター 上席アドバイザー)

### コメンテーター

水上 優 氏 (兵庫県立大学 環境人間学部 教授・建築史家)

榊田 倫之 氏 ((株)新素材研究所 所長・建築家・宇都宮市公認 大谷石大使)

### 司 会

須賀 英之 (宇都宮共和大学 学長・宇都宮まちづくり推進機構 理事長)

### ■須賀

これから「大谷石文化の魅力発信を考える」をテーマに、基調講演のお二人の先生にも入っていただいて、地元の有識者の方々とディスカッションをしていただきます。まずは、感想を一言ずつお願いします。

### ■橋本

お二人の講演に非常に感銘を受けました。ありがとうございます。ライトのことは意外と、神話化されている割には知られていないことが多いです。それから、大谷石についても同じで、それを実際に使っている立場の人がどう見ているのかということ、その辺が大変大事ではなかったかなと思っています。



### ■三橋

水上先生、榊田さん、フランク・ロイド・ライトと、それから大谷石と、栃木との関わりということで、大変分かりやすくお話しいただきましてありがとうございます。私も大学で、建築学科に入って2年生ぐらいの時に、「ライト＝有機的建築」という図式を擦り込まれてずっと来たのですが、有機的建築という意味、素材の話や、あるいは土としての大谷石ということで、認識を新たにさせていただきました。



## ■中津



お二人の先生には貴重なお話をいただきましたこと、ありがとうございます。大谷石というと、実は、私は生まれが鹿沼なのですが、鹿沼には深岩という石が同じようにあります。先生方は当然ご存じだと思いますが、また、凝灰岩として、私の知識の中では、1,000 万年ぐらい前に海底に沈んで、これは栃木の博物館に行けば、クジラの骨が展示されているのは、この辺が海だったということです。海の中の凝灰岩が変形して、美しい石になったという認識をしています。今日は改めて詳しいお話を聞かせていただき、感謝申し上げます。

## 【フランク・ロイド・ライトと大谷石】

### ■司会

先ほどの大谷石らしさで、石と土と木という3つのキーワードがありました。榎田先生、大谷石の特徴をお願いします。

### ■榎田

大谷石が好きで、大谷町に来た時にいろいろ教えていただいたのですが、最初に蔵を見た時に、私は蔵というのは礎石造りでできていると思い込んでいたのです。それをいろいろ聞いていくと、礎石造りというのは近代以降、西洋建築が入ってきてから礎石造りのものができたということです。それまでは、日本というのは木造建築なわけですから、大谷石というのは、蔵においても石を張るという感覚でかつて使われていたということを知って、それが非常に扱いが日本らしいな、とまず思ったのです。

それが、東京で民藝館を見ている時に同じような、木の腰板のように扱っているのを見て、蔵と同じような扱いをしている、これは私の中ではちょっとした発見のように思ったというのがあります。そこから、日本的な素材の扱いや文脈の中に西洋的な石とは扱いが違う手法があるのだと、大谷石を通して感じました。ですので、石・土・木というキーワードに、その時に結び付いたということがありました。

### ■司会

水上先生、それをどうしてライトが選んだというか、その経緯をお願いします。

### ■水上

ライトは「the nature of materials」と題された雑誌連載論文で、木について、石について、テラコッタについてなど、それぞれの素材の一つひとつ取り上げながら語っています。その中では、常に素材の向こうにある自然の、何か偉大な、それを生み出したエネルギーや歴史性が語られているのです。それとともに、それが自分の手元に来た時に、どのような加工のしやすさや、

他の素材との組み合わせのしやすさがあるか、などを考えています。ライトはイミテーション的なもの、偽物的なものを嫌うのですが、ピュアな素材というか、そういうものの組み合わせの中に何か新しいメッセージというか、問い掛けてくるものがあるということを見ていました。

榊田先生が「大谷石には石の側面と木の側面と土の側面がある」とおっしゃいました。木の部分とはミソのことですが、大谷石には石の側面と木の側面と土の側面があるというのは、ライトからすると願ってもないというか、それこそ根源的に望ましいことです。ライトはありとあらゆるものが繋がって一つになるということを言いたいのですが、それだけにいろいろ分かれていることは大事なのです。分かれていることは大事で、自然は同じものを二度とつくりたくないと言っているぐらい、全て違うのですが、全て一つだと言いたいのです。そういう意味で、大谷石の持っている3つの素材が重なって一つになっているようなものというのは、ライトから見てもすごく魅力的だろうなと思いました。榊田先生の分析にすごく感銘を受けました。

#### ■司会

アメリカ以外で、ライトの建築で現存しているものが日本に多いというのも、そういうことがあるのでしょうか。

#### ■水上

あるかもしれないですね。計画自体はバグダットなどでもあったのですが、実際に動き出したものは1つありません。後期のプロジェクトで、その土地固有の素材感などというのは、ライトも掴みきれていなかったと思うのですが、日本については、若い頃からシカゴ万博の鳳凰殿などに触れていたんで、素材感を大事にする日本に対して非常に近いものを感じていたと思います。

#### ■司会

榊田先生のお話の中で、京都の帝国ホテルで大谷石を使うことを検討されているとのことでした。現代建築においての大谷石の意義というか、捉えられ方・扱われ方というのは、どのようなことでしょうか。

#### ■榊田

われわれの世代と、上の世代もそうなのですが、ある種、近代建築以降の教育を受けている建築家がほとんどです。そういう意味では、ミース・ファン・デル・ローエと、ル・コルビュジエと、フランク・ロイド・ライトというのは近代建築の3大巨匠といわれるように、その影響というのをわれわれは受けているので、先ほど先生がおっしゃったイミテーションを嫌う、物質的なものをそのまま生かしたいという意識はものすごくあるのです。

ですから、石をあまり表層的に扱いたくないという意識というのはものすごくあります。インテリアの内装の一部と表層的に大谷石を扱うという、表層的なものではなくて、やはり物質的な

よさですね。ですので、内装材の一部という感覚ではない、石が持っている本質的な部分を建築表現の中で使っていきたいという、そういう感じがあるのです。

## 【大谷石・大谷石文化について】

### ■司会

三橋先生と橋本先生は、また違った角度から大谷石や大谷石文化について研究をされてきたので、ご紹介していただければと思います。資料8が三橋先生の、資料6が橋本先生の資料です。

### ■三橋

資料8に移る前に、少し口幅ったいのですが、なぜライトが大谷石を使って帝国ホテルをデザインしたかというところで、補足になるかどうか分かりませんが、にわか勉強したところでは、ライトがまだアメリカにいて、帝国ホテルの構想を練っている時分だったと思うのですが、マヤ文明展というのを見たようなのです。それで、えらく石という表現に感銘を受けて、これは、帝国ホテルは石で造ろうと思ったということです。

日本に来て、いざ仕事本格化して、では日本のどの石を使おうかと考え、いろいろ関係するところを調べて、結果的に運ぶコストと、それから産出量、この2つから、結局大谷石がいいとなったそうで、初めから帝国ホテルは大谷石だということではなかったようです。そこは補足させていただきますと思います。

それから、資料8については、今日のシンポジウムのテーマが大谷石文化ということですから、帝国ホテルが一大拠点たる存在です。

しかし、宇都宮を中心とした、私はメンバーではないのですが、大谷石研究会が精力的に調査をされて、宇都宮の中心市街地で数百の石蔵があるということ、それから北関東を中心にいろいろな大谷石の建築を発掘して、検証しているということがあります。私としては、農村など、特に大谷石の長屋門に着目したわけです。それで、資料8にあるように、長屋門という形式は日本全国にあるのですが、きちんと調べていませんが、大谷石を使った長屋門というのは恐らくこの土地ぐらいではないかと思っています。

それと、先ほど榊田さんご紹介されていた日本民藝館、それから益子参考館です。これは示し合わせたわけではなくて、たまたま資料として一致したわけなのですが、ライトほどの影響力はないかとは思いますが、柳宗悦と、それから濱田庄司、このコンビが大谷石を使って、つまり、大谷石が日本民藝館のシンボルになった第2の功績者ではないかということで資料を作りました。

ちょうど1930年ごろに、濱田庄司が益子で窯を築いて活動を始めた頃、柳宗悦も民藝運動の拠点を作ろうというので、いろいろ画策していた時期に、濱田庄司が柳宗悦に、日光街道にいい大谷石の長屋門があるぞということで、どうもそそのかしたと関係する本には書いてありましたので、そこも少しご紹介したいと思います。そういう意味で、この2人が大谷石文化の、今につながる功績者ではないかということが、この資料8の主な内容です。

## ■司会

柳宗悦にも評価されていたという、それは心強いところです。

## ■橋本

資料6の中で、これまでの話の中で、ライトがどうして大谷石に注目して、そもそも帝国ホテルをどうして選んだのかという経緯は出ています。資料6の、9ページの図16をご覧ください。図15というのは、今まさに明治村に移築された状態なのですが、実は大谷石ではなくて菩提石という、図16に使われている石を最初にライトは希望しています。それと大谷石を比べてみると、どこが似ていてどこが違うか、一番似ているのは有孔質の、穴が多い石であるということです。

なぜこの菩提石が採用されなかったかという、これは北陸の石で、非常にいい石ではあるのですが、遠すぎて埋蔵量が少ないと。要するに、日比谷まで持ってくるのに大変だったので、関東でそれを満たすものは何かといった時に、大谷石だったというのがあります。ですから、大谷石がどうしてライトに注目されたかというのは、一つはやはり石の質感、それから色合い、手触り、風合いということがすごく大事なかなと思います。

その中で、逆に大谷石そのものを見てみると、今度は、私の資料の中の11ページの図21と22、それから、その前の10ページの19あたりを見ていただきたいのですが、ライトがどのようにして大谷石と出会ったのかは、なかなか謎に包まれています。使ったのは確かなので、では、その石はどのような石なのか、もう少し実証的に私が研究しています。

帝国ホテルライト館、つまり明治村に行ったもの、それから山邑邸の、まさに水上先生から紹介された、発掘された部分、それから、他にも遠藤が設計した建物の大谷石を、岩石学的な分析をしています。それと、実際にそれを、石を供したホテル山というところ。ここも行って、どのような地層で、どういう石なのかというのを調べたのが図20ということになります。

それを見て非常に面白いと思ったのは、現在われわれが知っている大谷石と、ライトや遠藤が使ったホテル山の大谷石は、また少し違います。大谷地区の中でも、深さや地点によって大谷石はものすごく変化に富むというところも、実証的に調べ出すと検証できます。従って、大谷石はものすごく人間的な石なのではないかと私は思います。バリエーションがあります。例えば稲田石のように採掘場ごとの差異や個体差が小さい石材ではなくて、ここの大谷石はこのような顔をしている、ここの大谷石はこういう性質というのがあって、それもやはりライトが非常に引かれたところなのではないかと思っています。

## ■司会

ホテル山は民地になっていますが、歴史的なものとして残していければな、と思っています。ホテル山の石の大谷石の際立った特徴はありますか？

## ■橋本

ホテル山というのは、ライト館に専門に石を供した東谷石材商店というところなのですが、大谷

地区の中で一番西北になって、実は西北の上部のほうでは、最も大谷石として上質な石が出ています。白くて大谷石のくせに硬いのです。それで、岩片も多いです。近年いろいろ調べていて、大谷石の中では5層に相当する、もしくは4層に相当するのではないかと思います。ですから、一つの推測ですが、この特性は、ライトが大谷石にレリーフを施したことともものすごく関係しているのではないかということもあります。この石であるからできたのではないかということもあります。

## ■水上

地層や石そのものについてはあまり詳しくはありません。橋本さんに以前頂いた本の論文などを読みながら勉強させていただいたようなところです。今、ヨドコウ迎賓館、旧山邑邸で使っているのは地層のどの辺りの石なのでしょう。時間の経過の中で装飾部分のエッジも緩くなってきています。帝国ホテルの時の装飾の状態がどうだったのかというのを、大谷石のこの時期に採られた、この層からだからこうなるというものが連動されているとすると、すごく面白い。そういうものが実証的に明らかになれば、大変興味深いと思います。

## ■司会

石張りの外装に使うというところと、それから暖炉のレリーフなど、装飾的に使うというか、様々な使い方があってと思います。榊田先生にアドバイスいただければと思います。

## ■榊田

まず、京都の帝国ホテルに使う石は、どの大谷石を使ったらいいですかという相談をしたいです。このような、大谷石とひとくくりでもいろいろな顔があるということだと思うので、本当に相談したいと思うぐらいです。皆さんも、このような大谷石を使えなどの意見があったら聞きたいと思うのですが、今まさに最終局面なので、今だったらぎりぎり間に合うという感じです。

なぜそう思うかという、今、日比谷の帝国の入り口に、暖炉に見立てた大谷石のレリーフというのはあるのですが、随分白くて、ミソがなくて、大谷石らしくないなというふうに見えるものがあります。打ち合わせに行くと大体あれに、最初に対峙してみるのも、もう少し私としてはミソが多い、大谷石らしいというのを使ってほしいなと思います。ですので、橋本さんの話を聞いて、どこの、どういうタイプの大谷石を活用していくかというのは、今後掘り下げてみたいと思いました。

## ■司会

いろいろな大谷石の、それぞれの産地の魅力が伝わればいいなと思っています。ライトが作った家具や椅子、調度など、そういうものも再現されるのですか。

## ■榊田

京都においては、先ほど申し上げた、建物自体が1936年に建った建物で、様式的に少しアー

ルデコの雰囲気が残されている建物です。ライトの帝国ホテルと、いわゆる多角形を活用したようなデザイン、そういった、そのまま模してやるというのはなかなかできないので、そこにある建築的なフックやナラティブ、そこに持っている文脈をどのように形態化できるかということです。分かっている人を見ると、何となくそういうところを引用しているのだなというのが分かるようにしていった、これは素材についても、形態的な扱いについても同じように考えているわけです。

## 【大谷石文化の魅力発信を考える】

### ■司会

本題の、「大谷石文化の魅力発信を考える」ということです。これから、いろいろな方面で、先生方のご指導もいただきながら進めていく、ソフトの面とハードの面の両方があると思います。県文化協会の中津会長は、まちづくりのプロでもあります、いかがですか。

### ■中津

その前に、先ほど建築で大谷石を使うというお話があったのですが、実は私、四十数年間住宅会社をやっていて、テレビの番組で「秘密のケンミンSHOW」という番組が来て、当社のモデルハウスを2棟使っていただいたのです。実は2度とも同じところをリクエストされ、その建物は、実はリビングの壁一面に大谷石を張って、厚さ3センチぐらいだったと思います。これを張るのが非常に難しく、アルミの網を作り、そこに固定するような仕掛けを作って、東日本大震災も無事クリアできたということで、非常に自信を持ったというのがあります。

その時、なぜ大谷石かというのと、大谷石の素材と、見た美しさというのも当然あるのですが、実は、これは先生方に聞かないとよく分からないのですが、私はその時に、大谷石の中にはゼオライトという素材が内在していて、これは非常に空気をきれいにするという話を聞いています。今では、スレートなど、いろいろな建材が出てきていますけれども、当時としてはその大谷石を張ることによって、室内の生活環境を改善できたという実績というか、そういうものもあって造りました。それがテレビ局から見ても非常に新鮮で、テレビ番組では2回とも同じリクエストということは、それなりの反響があったという認識をしています。

それで、今のご質問の、今回、県のほうで新たな文化と知の拠点ということで、これは少し話をすると長くなってしまいますのですが、私は3つの活用方法を考えています。特に、内容についてはまた後であれですが、まず文化と歴史を、栃木県の文化協会というところで仕事をさせていただいているのですが、どの場所でどういうものを発表するか、これは非常に難しいです。歴史的なものや無形のものを表現する、形になっている絵画や彫刻、陶芸は出せるのですが、そういうものを展示するための場所として使えるのではないかというのが一つです。

それから、観光資源としての機能というのを考えてみたらいいのではないかと思います。観光資源という形では、これは私が勝手に、個人的に思っていることなのですが、旧帝国ホテルのメインロビーのセンターにあった柱、これは、私の記憶で申し訳ないのですが、一度宇都宮の美術

館に展示されたことがあるはずなのです。その時に大谷石の柱を見て、非常に画期的でもありませんし、芸術的でもありませんし、われわれは大谷石というものを構造体としてしか見ていなかったものですから、装飾体としての美しさというもので、非常に、ある意味でショックを受けたということもあります。そういうものを、モニュメントでもいいので、その中に作ることはできないのだろうかと思います。

もう一つ、あえて言うならば、宇都宮の駅を越えて新幹線の改札に行くと、真ん中に柱があるのです。その柱はみんなコマーシャルが張ってあります。ローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ空港というのがあります。しかし、このレオナルド・ダ・ヴィンチ空港というのは本当の名前ではなくて、フィウミチーノ空港というのですよね。しかし、イタリア人の誇りであるダ・ヴィンチの絵画を空港内に張って、文化を強調しているわけです。

ですから、私は、宇都宮の駅に降りてきた時、この県は何の県であるかということを知りたいだけでなく、大谷石の餃子の像もあるのですが、あまり目につかないので、正面の柱は、旧帝国ホテルの柱をまねるというのではないですが、参考にしてもらったらどうかということを考えています。

それから3番目は、研究教育のベースとしてこの拠点を活用しなければならないだろうと思います。今日は国内の建築専門家の先生方も来ているのですが、あとはライト財団や、デザイン等の専門学校の学生さんたちも含めて、栃木県の文化を支えるための大谷石の活用というものをいろいろな角度から議論して、それを単なるアーカイブ的な意味やデジタルアーカイブではなくて、形として見て触れることができるような形にして、文化と知の拠点到こういったものを置いて、次世代の建築家やデザイナーの育成のためにも、ぜひやっていただければという思いを持っています。

## ■司会

橋本先生はその際、市の美術館で大谷石の研究を担当されていました。

## ■橋本

今、中津先生からご紹介がありました柱は、2017年に宇都宮美術館で開催しました、石の街うつのみやというもののメイン提示で、私はその企画の担当でした。あの柱なのですけれども、あれはライト館の食堂の柱の一部なのです。2本ありまして、1本が明治村、もう1本はINAX、今はLIXILといますけれども、のINAXライブミュージアムがそれぞれ持っています。

それで、そういう実物もすごく大事です。実物というとはどうしても、では絵画や彫刻、図面かというとはそうではなくて、素材や記録、特にライトのように、実物が宇都宮の市内に建っていないのであれば、それに関する資料、柱のように、あれは一部再現をして自立するようにしたものなのですけれども、そういうものが、この知と文化という点には非常に必要になってくるだろうと思います。

ですので、拠点の中で一番大事なのはコレクションだと思います。どういうものを持って、展

示よりもコレクションがないと研究というのはできませんので、発信もできません。それから教育普及もできませんので、どれほどライトおよび栃木県と大谷石、あるいは栃木県と建築文化に関するようなものをコレクションして、それを活用していけるのかということが大事なかなと思います。

ライト以外に、例えばレーモンドは宇都宮に来ましたし、遠藤も栃木県に作品を残しています。他に、松が峰教会を設計したヒンデルや、あるいは日光真光教会を設計したガーディナーなど、非常に建築と石文化というものが盛んなのが栃木県ですので、そういったものがコレクションできるような拠点になるといいなと思っています。

### ■三橋

私からは、長屋の話をしたので、それにこじつけて、お話をさせていただきたいと思います。まず、この拠点が美術館と、図書館と、それから文書館という3つから構成されるという話ですけども、当然それぞれに、シンボリックな意味も含めて、何らかの形で大谷石をぜひ使っていただけいいなと思うことの他に、敷地全体を統括するというと大きさですが、つまり、長屋門がある農家のお屋敷というものがヒントになるのかなと。その長屋門の先に母屋がある、つまり軸線が明確になっています。その軸の両側に大谷石の蔵やその他の付属舎が並ぶと、これが長屋門を持った農家の構え方なわけです。

それをそっくりそのままというわけにはいかないにしても、少なくともシンボリックな意味での、ウェルカムゲートといえますか、それは今の日本風の長屋門をそのままというわけにはいきませんが、鉄骨、それからガラスおよび大谷石で、シンボリックに構成されるウェルカムゲート、これが長屋門として敷地全体を統括していくといえますか、そういう位置付けになるようなデザインがあると、より一層栃木らしくなるのかなということが一つです。

それからもう一つ、デザインのプロセスに踏み込んで申し上げると、県の関係の方々もいらっしゃる前ですけども、やはり100年に一度の大プロジェクトですから、いきなり最初から、基本設計の段階から、全てPFIでと、経費を考えればそのほうが安上がりということが衆目の一致するところだと思います。

しかし、少なくとも基本設計の段階では、実績のない若い方々も含めたオープンなプロポーザルを実施して、つまり、県民の方々に広く中身を知っていただく意味でも、オープンな、しかも選考自体が公開されるというようなプロセスを、ぜひ取っていただければと思います。それが、その先からPFIになることがスキームとして可能かどうかは分かりませんが、その後にPFIとして進めてはどうかというのが、誠に無責任な私の考え方です。

### ■司会

私が「文化と知の拠点」構想検討委員会の委員長として、28名の有識者の方と議論してきた感想が資料9にあります。場所と規模と、美術館・図書館・文書館を一体的に運営していくと、そこまでは決まったのですが、では何を、栃木県らしい、世界や全国に誇れる文化として発信して

いくのかという議論はこれからです。

新しい美術館・図書館・文書館の学芸員たちが、一緒になって教育研究できるものは何かという議論をしていただく。新たなテーマを決めて、一緒に教育研究していくことが大切ではないかと思っています。また、東照宮の建築美術も、もう一つのテーマとしてあるのではないかと思います。オープンな議論をこれからしていきたいのです。

## ■水上

先ほど、ライトが帝国ホテルの時に大谷石を使った理由として、当時マヤの文化を非常に見ていたということもご紹介いただいたわけですが、例えば帝国ホテルのライト館を、彼は「日本への捧げものとして造っている」と言うわけですが、いわゆる神社のモチーフなど、具体的な日本の伝統的なモチーフなどを持ってくることはしていないわけです。

ですので、先ほど、駅を降りた時、真正面の柱を、と言っていたかもしれませんが、ライトをまねたようなイミテーション的なものをそこに持ってくるよりも、例えば、それこそ若い人が、ライトの考えるスピリットに共鳴して、素材感などを現代的に解釈して、自分なりに新しいものとして提案する方が面白いと思います。その根底には、素材に対するある種の深いまなざしみたいなものがあって、それがこの栃木という場所にはずっと眠っているのだ、それを明らかにしていくのだというほうが、今これからのことになるかなと思います。

ですから、美術館には現物、図書館には著書など、本物と呼べるものがあるべきだと思いますが、これからの美術館の全体像などは、長屋門の形式を取り入れるとしても、若い人がそれを改めて解釈して、未来に向かって新しいものとして打ち出していくということが、これからもどんどん展開していく可能性が、大事なのかなと思います。

## ■司会

大谷石大使として榊田先生の抱負があれば。

## ■榊田

今の水上先生の話に付け加えるとすると、やはり何を見に行きたいかということ、経験というか、体験というか、そういったものを感じたいということだと思うのです。ですので、私もずっと素材に向き合って実務をやっているのですが、最後に竣工すると、写真を撮って、カッコいいでしょうという感じで見せてしまうのですが、実際に同じ白い空間をつくるにしても、例えば、先ほどのゼオライトの話もありましたが、ペンキで白く塗っている空間と、漆喰で白く塗っている空間は、写真に撮ると白なのですが、実際にそこに身を置いて、ずっとそこにいると、何か五感に訴えかけてくるものが圧倒的に違うわけです。

やはり調湿されていますし、吸音されますし、写真には全然写ってこないような世界というのがあって、そういう素材が持っている本質的なものをどう体験できるのかというのは、すごく大事なポイントだなと思っています。ですので、単純なイミテーションという感覚ではな

くて、素材を見ていった時に、そこにどういう本質的な部分があるかというのを、ぜひ体験の中に、空間の中に取り込んでもらえるといいなと思います。

## ■司会

先ほどの帝国ホテルのダイニングの素敵な写真を拝見して、これからどういうふうにそういった空間を再現していくのかというのも、栃木県「文化と知の拠点」の課題かと思います。ニューヨーク・グッゲンハイム美術館のレストラン名がライトになっていますが、そういうソフト面での発信というのも大事かと思います。

## ■中津

私は、大谷石というのは子どもの頃からずっと見てきましたけれども、壇上にいる先生、須賀先生も含めて、実は栃木県生まれは私だけなのです。ということは、栃木県外で生まれた方たちのほうが、大谷石のよさや大谷石の持つ文化の力というものを、よく理解しているのだなと感じてしまうのです。それはなぜかということ、私が子どもの時は、大谷石の使い方というのは本当に素材そのものだけなのです。少し軽いということと、加工しやすいということで、塀を作ったり、蔵は立派な蔵としてあるのですが、そういうものでしか大谷石という概念は、私は持っていなかったのです。

大学の時に、私は建築科に進みましたので、その中でフランク・ロイド・ライトという者が大谷石を使ったと、初めてその時に私は知ったのです。それと同じように、県民の方の中にも、そういう方はたくさんいるのではないかという気がします。ですから、ある意味のアンコンシャスバイアスみたいなものがあって、みんなそういう使い方でしたか大谷石を見られなかったというか、見てこなかったという反省というのでしょうか。

これを、目を開かせていただいた方が、ひょっとしたらライトが設計した帝国ホテルだったのかなという気がしてならないのです。ぜひ、これをどういう形であれ、どういう場所であれ、もう少し県民に理解をいただいて、多様性というものを考えたらどうかと、今は考えます。

## ■三橋

今ご発言をいただきました5名の方の全てを引き受けるというわけにはいきませんが、やはり私のほうに響いたのが、点を線にして面に広げていくという、そのことが引っ掛かったというか、心に響きました。というのは、栃木県というのは、再三の話で恐縮ですが、長屋門一つ取ってみても、大変豊かなところだと常々感じています。いろいろいいものがあって、ただ、それを外に向けて発信していくのがそれほど上手ではないのかなと感じています。

よくいわれることで、攻めの群馬、守りの栃木と聞かれる方も多いと思うのですが、何事をするにしても、群馬県は速いな、スピード感があるなと思います。それに対して栃木県の場合は、他がだいたい動き出してから、ではうちも続いていくかというような、県の方、市の方には大変申し訳ないのですが、そういうことを常々感じています。今回の文化と知の拠点ということが、県民の気質を変えていく一つの大きなきっかけになればいいなと思います。

ですから、その時、橋本さんがおっしゃったように、コレクションですよ。県内を広く、くまなく発掘して、いろいろなストーリーを組み立てて、ぜひ美術館や図書館などに生かしていただきたいと思います。これが面として発信できると、非常に強力な文化の発信拠点になるのかなと感じました。ありがとうございました。

## ■橋本

今日は皆さまのお話、会場からの皆さまのお話も聞いて、非常に感銘を受けたところが、やはり大谷石をみんな考えているのだなと、大谷石に対して意識があるのだなというところなのです。今、三橋先生もおっしゃったように、県民性や風土というのがあります。でも、それもよさだと思わないといけなくて、大谷石を生んだ風土、それから、もしかすると、その発信の仕方が、今まであまり上手ではなかった風土、全部同じなのです。

ですから、栃木県ならば栃木県らしいものを、栃木県らしいやり方で、一つここで重要なのは、コレクションと同じように時間です。今年、来年というペースではなくて、100年たった時に、いい施設をおじいちゃんの世代が造ってくれたなというところに持っていかなくてはいけないと思います。物を集め、知識を集め、それを活用していくのは、建物であれ、ソフトであれ、すごく時間がかかります。評価も時間がかかりますので、腰を据えて皆さんと一緒に、大谷石を100年後の人に伝えられるようにできたらいいなと思います。ライトもきっとそれを望んでいると思います。

(参加者のご意見・ご質問については省略)

## 【おわりに】

### ■司会

それでは、榊田先生と水上先生には、栃木県へのエールを送っていただければと思います。

### ■榊田

先ほど三橋先生から発信という話がありましたけれども、私も大谷石大使として、まだあまり仕事できていないなと思っていますので、発信の一つを担っている立場として、まずは西の帝国ホテルで大谷石をやってみるというところから、どういう反応があるのかというのを皆さんと楽しんで、その後にきちんと役割を果たしていきたいと思っています。

あとは、先ほどの話ともつながってくるのですが、やはり反芻するだけというか、振り返るだけではなくて、イノベーションというか、新しさも同時に必要になってくるので、ライトを愛でるといってもいいのですが、脱ライトという視点も必要のかなと思うので、その両軸で、新しさと古さを共存させるように、私もひとつ、一人の実務者としてチャレンジしていきたいと考えています。

### ■水上

先ほどの発表の中でも申し上げたのですが、ライトは「一から多が生まれる」ということを言うのです。一に対して突き詰めていく研究や文化的な継承などと同時に、多が生まれるバラエティーの世界というか、いろいろなものがそこから生まれてくるのが大切だと思います。その生まれてくるものと一の間にはいろいろな対話があり、空間が生まれるとライトは言っています。

例えば石にしても、物としての石だけではなくて、例えばそれに光が当たる、他のものと組み合わせるなど、そういうことで起こってくる変化なり、化学反応なり、そういうものの可能性もあると思うのです。ですので、本当に大谷石からどれだけバラエティーが生まれるかというのを、ぜひいろいろな形で検証していただいて、提案していただいて、新たな扉を開いていただければと思います。それだけのエネルギーが大谷には、一のほうにもありますし、多のほうにもあると思っています。これからの展開を楽しみにしています。

#### ■司会

先生方のエールを受けて、地元としてのお考えは。

#### ■橋本

先生方、ありがとうございます。大谷石は県の皆さまがもっと活用してくださることを待っています。どれぐらい待っていたかということ、大体1,500万年ぐらい待っていましたので、そのように受け止めて、物質としても、精神的なものとしても、大谷石を未来につなげていかななくてはいけないと思っています。

#### ■司会

宇都宮市美術館も一緒に連携してやっていきたいですね。

#### ■三橋

大谷石の産出量からすると、昭和40年代をピークとして、数十分の1まで減ってはいますけれども、他の石の産地から見れば、まだまだ産出量としては多く、そういう意味で可能性を秘めたところですね。やはり、県民一人一人がというと大げさかもしれませんが、少なくとも今日おいでの方々には、私も含めてなのですが、ぜひ大谷石をどう活用したらいいだろうといったことを新たに頭の片隅に入れていただいて、いろいろなアイデアを出して議論していただければいいのかなと思います。それが今日おいでいただいたお二人に対する感謝の気持ちにつながるのかなと思います。

#### ■中津

今日はありがとうございます。私も今日ここに出させていただくということで、大谷石を改めて勉強し直してよかったと思っていますし、また、先生方のご意見も非常に参考になりました。

やはり栃木県民、私は栃木県の文化協会長をやっているのですが、百人一首は宇都宮から出ているのです。これは意外と知らないですよ。小倉百人一首というのは、実際は宇都宮頼綱が原点であるわけです。

それから、栃木県宇都宮は日本三大歌壇の一つです。京都歌壇、鎌倉歌壇、宇都宮、これもやはり和歌の原点です。こういうことも意外と知らないのと同じように、大谷石についても専門的なことを知りません。こういうことを反省して、これからはしっかり、この知の拠点においては、こういう未来の人たちを育てる場所でもあると思っていますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

## ■司会

皆さまの熱心なご聴講と、先生方の素晴らしいお話により、有意義なシンポジウムになったことに改めて感謝申し上げます。登壇者の皆さまにもう一度拍手をお願いします。ありがとうございました。

資料 6

宇都宮宮内省シテライフ字部シテソシム  
「大谷石文化」の魅力発信を企てる フランク・ロイド・ライトがとらえた現したのもー  
配布資料

### ライトの「石」に改めて向き合う

橋本優子(近代建築・デザイン室)

●はじめに——大谷石とは  
大谷石(おおいし)とは、栃木県宇都宮市の西北部に位置する大谷地区が産地の岩石・石材です。  
岩石(地質学)としては、火山由来の破片や塊から成る火山砕屑物(火山砕屑物)が水中で堆積し、長い時間をかけて固化した凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。凝灰岩(火山砕屑物)は凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。凝灰岩(火山砕屑物)は凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。

●近代に「発見」され、今なお「未知」を帯びる大谷石  
利用の歴史が長く、しかし未知の事象が多い大谷石は、日本地質学会が2016年(平成28年)に発表した「石の石」(岩石・鉱物文化)のうち、栃木県大谷地区に採掘された。建造物におけるその利用、すなわち建築石材として見るならば、花崗岩(茨城県産)の岩石、方成石(岡山県産)の岩石(同じ花崗岩の一種)に匹敵する知名度を誇り、今なお採掘中(図2)。図2の「石」は日本を代表する石にはないが、花崗岩(茨城県産)の岩石、方成石(岡山県産)の岩石(同じ花崗岩の一種)に匹敵する知名度を誇り、今なお採掘中(図2)。

●「石」の「石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う

-1-

(001)

配布資料(橋本優子)

ライトの「石」に改めて向き合う

●はじめに——大谷石とは  
大谷石(おおいし)とは、栃木県宇都宮市の西北部に位置する大谷地区が産地の岩石・石材です。  
岩石(地質学)としては、火山由来の破片や塊から成る火山砕屑物(火山砕屑物)が水中で堆積し、長い時間をかけて固化した凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。凝灰岩(火山砕屑物)は凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。

●近代に「発見」され、今なお「未知」を帯びる大谷石  
利用の歴史が長く、しかし未知の事象が多い大谷石は、日本地質学会が2016年(平成28年)に発表した「石の石」(岩石・鉱物文化)のうち、栃木県大谷地区に採掘された。建造物におけるその利用、すなわち建築石材として見るならば、花崗岩(茨城県産)の岩石、方成石(岡山県産)の岩石(同じ花崗岩の一種)に匹敵する知名度を誇り、今なお採掘中(図2)。

●「石」の「石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う

-2-

(002)

配布資料(橋本優子)

ライトの「石」に改めて向き合う

●はじめに——大谷石とは  
大谷石(おおいし)とは、栃木県宇都宮市の西北部に位置する大谷地区が産地の岩石・石材です。  
岩石(地質学)としては、火山由来の破片や塊から成る火山砕屑物(火山砕屑物)が水中で堆積し、長い時間をかけて固化した凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。

●近代に「発見」され、今なお「未知」を帯びる大谷石  
利用の歴史が長く、しかし未知の事象が多い大谷石は、日本地質学会が2016年(平成28年)に発表した「石の石」(岩石・鉱物文化)のうち、栃木県大谷地区に採掘された。建造物におけるその利用、すなわち建築石材として見るならば、花崗岩(茨城県産)の岩石、方成石(岡山県産)の岩石(同じ花崗岩の一種)に匹敵する知名度を誇り、今なお採掘中(図2)。

●「石」の「石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う

-3-

(003)

配布資料(橋本優子)

ライトの「石」に改めて向き合う

●はじめに——大谷石とは  
大谷石(おおいし)とは、栃木県宇都宮市の西北部に位置する大谷地区が産地の岩石・石材です。  
岩石(地質学)としては、火山由来の破片や塊から成る火山砕屑物(火山砕屑物)が水中で堆積し、長い時間をかけて固化した凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。

●近代に「発見」され、今なお「未知」を帯びる大谷石  
利用の歴史が長く、しかし未知の事象が多い大谷石は、日本地質学会が2016年(平成28年)に発表した「石の石」(岩石・鉱物文化)のうち、栃木県大谷地区に採掘された。建造物におけるその利用、すなわち建築石材として見るならば、花崗岩(茨城県産)の岩石、方成石(岡山県産)の岩石(同じ花崗岩の一種)に匹敵する知名度を誇り、今なお採掘中(図2)。

●「石」の「石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う

-4-

(004)

配布資料(橋本優子)

ライトの「石」に改めて向き合う

●はじめに——大谷石とは  
大谷石(おおいし)とは、栃木県宇都宮市の西北部に位置する大谷地区が産地の岩石・石材です。  
岩石(地質学)としては、火山由来の破片や塊から成る火山砕屑物(火山砕屑物)が水中で堆積し、長い時間をかけて固化した凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。

●近代に「発見」され、今なお「未知」を帯びる大谷石  
利用の歴史が長く、しかし未知の事象が多い大谷石は、日本地質学会が2016年(平成28年)に発表した「石の石」(岩石・鉱物文化)のうち、栃木県大谷地区に採掘された。建造物におけるその利用、すなわち建築石材として見るならば、花崗岩(茨城県産)の岩石、方成石(岡山県産)の岩石(同じ花崗岩の一種)に匹敵する知名度を誇り、今なお採掘中(図2)。

●「石」の「石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う

-5-

(005)

配布資料(橋本優子)

ライトの「石」に改めて向き合う

●はじめに——大谷石とは  
大谷石(おおいし)とは、栃木県宇都宮市の西北部に位置する大谷地区が産地の岩石・石材です。  
岩石(地質学)としては、火山由来の破片や塊から成る火山砕屑物(火山砕屑物)が水中で堆積し、長い時間をかけて固化した凝灰岩(ぎょうかいがん)の一種に分類されます(図1)。

●近代に「発見」され、今なお「未知」を帯びる大谷石  
利用の歴史が長く、しかし未知の事象が多い大谷石は、日本地質学会が2016年(平成28年)に発表した「石の石」(岩石・鉱物文化)のうち、栃木県大谷地区に採掘された。建造物におけるその利用、すなわち建築石材として見るならば、花崗岩(茨城県産)の岩石、方成石(岡山県産)の岩石(同じ花崗岩の一種)に匹敵する知名度を誇り、今なお採掘中(図2)。

●「石」の「石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う  
「石の石」に改めて向き合う

-6-

(006)

タイトの石」に改めて向き合う 配布資料(橋本優子)

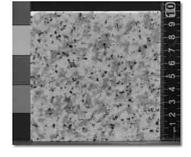


図9. 稲田石  
 想名 高山採石場(高城県高岡市稲田堂  
 業、高天原)、2023年11月に採掘  
 所蔵・撮影:宇都宮大学工学部石川研究室



図10. 国会議事堂 稲田石製の正面外観  
 (東京都千代田区永田町)、2024年3月  
 撮影:橋本優子



図11. 聖徳記念絵巻館 万成石製の正面外  
 観(東京都新宿区西ヶ丘町)、2024年5月  
 撮影:橋本優子

-7-

(007)

タイトの石」に改めて向き合う 配布資料(橋本優子)




図12.(左) 旧藤原家住宅 伝統的な木造大谷石製の石蔵(栃木県宇都宮市今泉)、2015年2月  
 撮影:橋本優子  
 \*宇都宮では、江戸時代に始まる木造大谷石製の伝統工芸を継承する。旧藤原家は、1851年(嘉永4)に造営の石蔵(石蔵)と文庫蔵(中央)、1895年(明治28)の新蔵(左蔵)が現され、いずれも石蔵である。



図14. 帝國ホテル新館(今小館) 正面中  
 央入口(東京都千代田区内幸町)、1923年  
 夏頃(竣工直前)  
 高梨由太郎、帝國ホテル、1923。

図13.(右) 藤原家石蔵 日本近代が生んだ大谷石組積造の石蔵(栃木県宇都宮市大谷町)、昭和戦前  
 画像提供:大谷石材協同組合  
 \*宇都宮では、明治中期(1880年代-1900年代)に考案された大谷石組積造の近代工法を継石蔵と称する。  
 継石蔵(石蔵・年鑑石)とは、1908年(明治41)に竣工の石蔵(右)、1912年(明治45)に上棟の東蔵(右)  
 が現され、いずれも継石蔵である。

-8-

(008)

タイトの石」に改めて向き合う 配布資料(橋本優子)



図15. 博物館 明治村 帝國ホテル中央立  
 間のカヌーショップ(愛知県大山市内山)、2023年12月  
 撮影:橋本優子

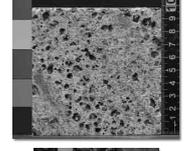


図16. 香焼石(旧石材)  
 香焼石の旧・採掘場(石川県小松市香焼  
 町香焼山)、採掘年不詳(2016年7月に  
 香焼町で譲り受け)  
 所蔵・撮影:宇都宮大学工学部石川研究室



図17. 博物館 明治村 帝國ホテル中央立  
 間のカヌーショップ(愛知県大山市内山)、  
 2023年12月  
 撮影:橋本優子  
 \*建物の部分修繕・修復に際しては、竣工  
 当時の旧石材、新たに加工した昭和戦後の石  
 材のほか、アレキサンドリア・GCK  
 (砂)の組積造でつくられた香焼石製  
 用され、どれも色合いと質感が異なる。

-9-

(009)

タイトの石」に改めて向き合う 配布資料(橋本優子)

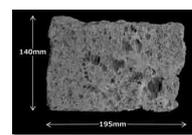


図18. 帝國ホテル新館(今小館) 竣工当  
 時の構成材(2024年1月に博物館 明治  
 村より譲り受け)  
 撮影:橋本優子  
 \*本構成材は、図19で示す試料の1点  
 に加工し、宇都宮大学工学部石川研究室  
 で所蔵。画像は加工前の表面で、経年変  
 化が見て取れる。

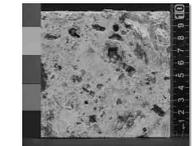


図19. 大谷石(旧石材・中目)  
 旧・大谷石材商店採掘場(ホテル山) 栃木  
 県宇都宮市田下町入内)、1904-1923年  
 に採掘(2024年1月に博物館 明治村に  
 譲り受け)構成材の一部  
 所蔵・撮影:宇都宮大学工学部石川研究室  
 \*本試料は、図18で示す構成材を加工し  
 たもの。画像は断面で、内部のホコリが  
 見える。ホテル山の石材に固有な特徴が見  
 て取れる。



図20. 旧・大谷石材商店採掘場(ホテル  
 山) 栃木県宇都宮市田下町入内) 北側  
 の露岩、2024年4月  
 撮影:橋本優子  
 \*1919年に開採され、2000年代まで採掘  
 が続いたホテル山では、最初期から露天  
 掘(地上)と地中掘(坑内掘(地下))が同時  
 に行われた。この山の石材が特徴として  
 は、自然に帯びた色合い、縦貫で線状なこ  
 と、岩片の多さが挙げられる。

-10-

(010)

タイトの石」に改めて向き合う 配布資料(橋本優子)

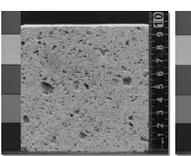


図21. 大谷石(旧石材・中目)  
 旧・大谷石材商店採掘場(ホテル山) 栃木県宇都宮  
 市田下町入内)、1923-1927年に採掘(2023年11  
 月に自由学園目録より譲り受け)  
 所蔵・撮影:宇都宮大学工学部石川研究室  
 \*本試料は、1927年に竣工した自由学園講堂(図7  
 =左蔵) 前の構成材(基礎石を加工したもの)。画像  
 は断面で、内部のみならず、ホテル山の石  
 材には固有な特徴が見取れるが、タイトの旧石材  
 (図19)とは性質が異なる。

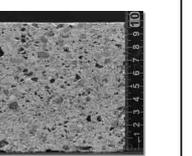


図22. 大谷石(旧石材・中目)  
 旧・大谷石材商店採掘場(ホテル山の隣接者) 栃木県  
 宇都宮市田下町入内)、1900年代前半-1950年代  
 に採掘(2024年4月に現場で採取)  
 所蔵・撮影:宇都宮大学工学部石川研究室  
 \*本試料は、1925年(大谷山)採掘工場の、ホテル  
 山を造営した大谷石材商店採掘場が手回時代に採  
 掘した丸組積造(図20)の原石を加工したもの。画像  
 は断面で、モザイク状に帯びる岩片が特徴的で  
 ある。同じ山に採れたタイトの旧石材(図19)、自由  
 学園講堂の旧石材(図21)と異質な点が顕著高い。

-11-

(011)

宇都宮共和国シテライフ学シンポジウム 2025/2/7  
「大谷石文化」の魅力発信を考える-フランク・ロイド・ライトがとらぎに熟したもの-  
三橋 伸夫 (宇都宮大学 名誉教授・宇都宮市政研究センター 上席アドバイザー)

## 農村にみる大谷石文化ー長屋門に着目してー 報告の骨子

- 耐火性に優れた大谷石はマチ、ムラを問わず経済力のある家の屋敷内における蔵の建築材として利用された  
※それ以前は栃木や川越にみられる土壁の蔵(見世蔵)だった
- 農村ではそれに加えて長屋門において、その多くが第二次大戦後に板張りの壁(腰壁)から耐震性のある大谷石張りの壁に替わった  
※第二次大戦後に長屋門をもつ農家の多くが経済力向上の下に長屋門をより立派な外観をもつものに改修(一部は建て替え)した
- 長屋門は大谷石を併せて、民藝運動の高揚を通じて東京に進出し(第二次大戦前)、民藝のひとつの(視覚的)シンボルとなった
- まとめ  
長屋門に着目すると、農村における大谷石文化は第二次大戦後に大きく花開いたのではないかと

1

(001)



## 宇都宮の長屋門(大谷石の腰壁)



いづれも筆者撮影

2

(002)



## 農村にみる大谷石文化ー長屋門に着目してー

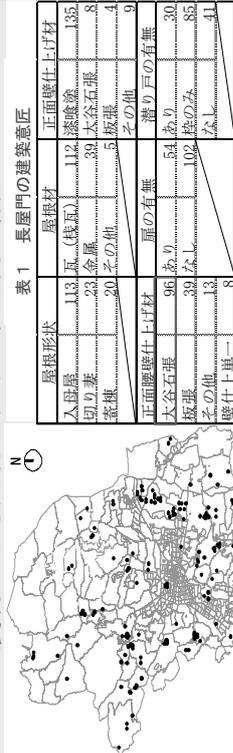
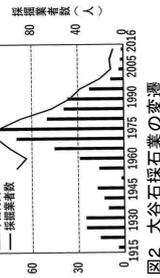


図1 宇都宮市の長屋門の分布(2008年)



宇都宮市石井町の長屋門  
(20数年前に建て替え、大谷石張り)  
出典:三浦陽斗「実態と意向の調査に基く宇都宮市の大谷石の再利用方針」  
『開く調査研究』、市政研究7つのみや第17号、2021.3、pp. 65-74

図2 大谷石採石業の変遷



## 農村にみる大谷石文化ー長屋門に着目してー



益子参考館・正門一号館  
(益子町)

(筆者撮影) <https://mingeikan.or.jp/floormap/honkan/>  
日本民藝館



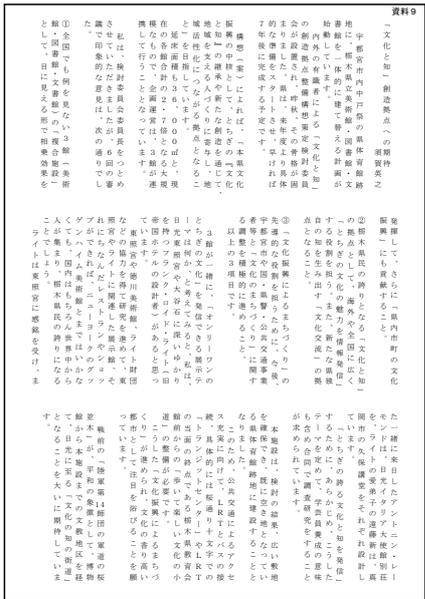
日本民藝館(昭和11年創建)は柳宗悦によって東京駒場に建てられたが、それに先立って親交のあった濱田庄司に自宅のための長屋門(日光街道沿いの大谷石の石屋根のもの)の購入と移築の手配を要請した(濱田がそがかした)

日本民藝館西館(旧柳宗悦邸)  
<https://www.google.com/search?q=>

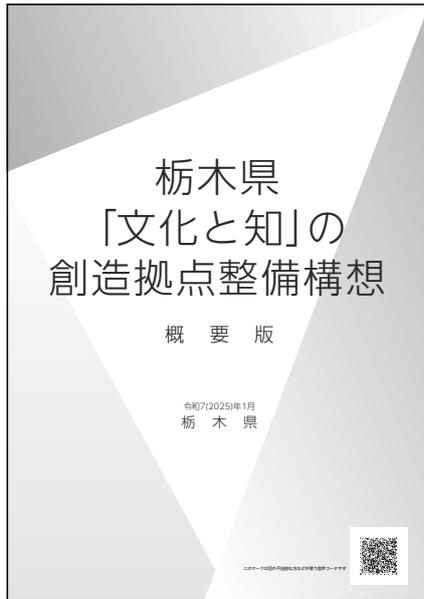
4

(004)

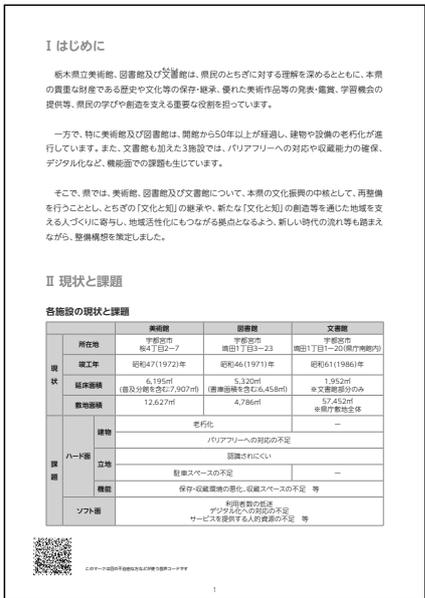




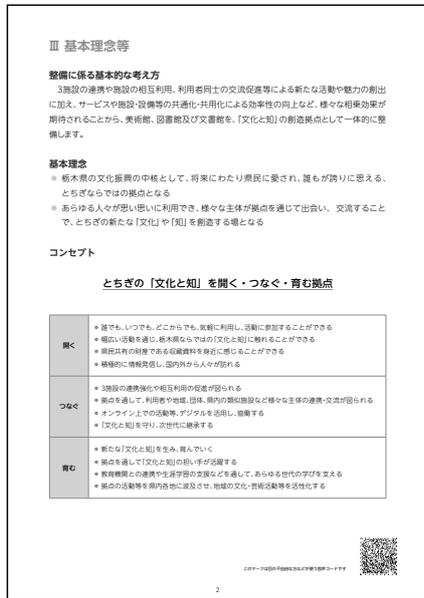
(001)



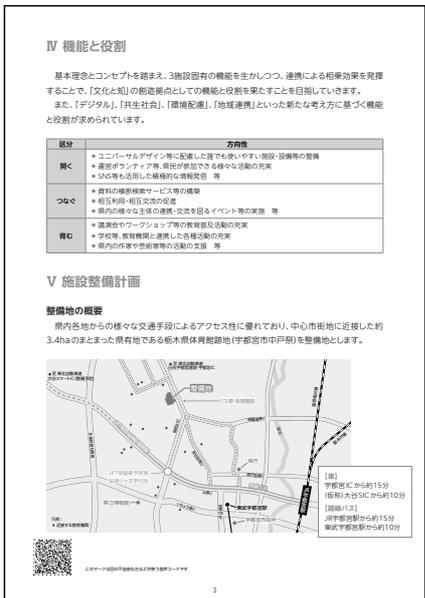
(002)



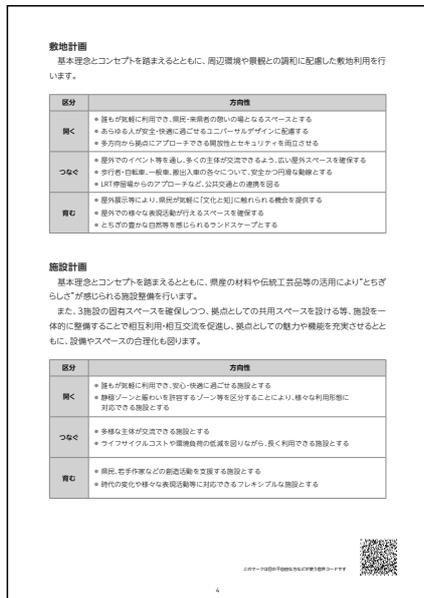
(003)



(004)



(005)



(006)

**諸室の考え方** ※市庁は、各施設日の運営ではなく、拠点として共有することを想定

**美術館の主な諸室 (約12,500～15,000㎡)**

機能	主な諸室
収蔵・保存	収蔵庫、展示スペース、ブリザベーションルーム、一時保管庫、くんげ室、撮影室 など
展示・公開	常設展示室、企画展示室、一時保管庫、ギャラリー、美術図書室(アトリエ/ギャラリー) など
調査・研究	研究室、書庫 など
教育・普及	ワークショップ室、公開制作室、講堂、多目的室 など
アメニティ	ロビー、エントランスホール、ショップ、レストラン/カフェ、キッズルーム など
その他	執務室、会議室、設備機室 など

**図書館の主な諸室 (約15,000～18,000㎡)**

機能	主な諸室
収蔵・保存	図書書庫、資料整理室、保存処理室、撮影室 など
閲覧エリア	公開書庫、(依頼)とちまちまコーナー、ハイパーコーナー、子ども読書支援コーナー、デジタルコーナー、新刊図書室(アトリエ/カフェ) など
調査・研究	閲覧エリア、閲覧室、サイレントルーム、対話閲覧室 など
教育・普及	業務エリア、レファレンスカウンター など
講堂・多目的室	講堂、学習室、多目的室 など
連絡・支援	読送準備室、展示スペース など
アメニティ	ロビー、エントランスホール、ショップ、レストラン/カフェ、キッズルーム など
その他	執務室、会議室、設備機室 など

**文書館の主な諸室 (約2,500～3,000㎡)**

機能	主な諸室
収蔵・保存	収蔵庫、参考資料室、作業室、くんげ室、撮影室、展示スペース など
展示・公開	展示室、閲覧室、展示準備室、ギャラリー など
調査・研究	研究室、調査整理室 など
教育・普及	講堂、学習室、多目的室 など
アメニティ	ロビー、エントランスホール、ショップ、レストラン/カフェ、キッズルーム など
その他	執務室、会議室、設備機室 など

007

**VI 管理・運営計画**

基本理念とコンセプトを踏まえるとともに、各施設の関連法令等遵守した管理・運営を行います。

区分	方向性
開	<ul style="list-style-type: none"> <li>独立施設として、「文化と創」の機能を踏でも活用することができるよう、管理・運営における公益性や透明性を確保する。</li> <li>デジタルを活用し、利便性を向上させることで、誰でも利用できる・利用しやすくなる施設づくりを進める。</li> <li>ポランティア等の活動を通じ、市民が施設の運営に参加できる仕組みを作る。</li> </ul>
つ	<ul style="list-style-type: none"> <li>県内の社会教育施設との連携・協力関係を強化することで、県内の「文化と創」を結ぶネットワークの中心としての役割を担う。</li> <li>県内の教育機関や各種企業をはじめとした多様な主体との連携を推進することで、市民のとりまに對する理解を深め、ふるさとへの愛着を醸成するきっかけづくりに寄与する。</li> </ul>
育	<ul style="list-style-type: none"> <li>県民の自主性と創造性を刺激する魅力的な取組を実施することで、多様な表現活動を支援することにより、市民の創造性を高める機会を提供する。</li> <li>「文化と創」の創発拠点として、「文化と創」に係る活動が際に行われる環境を整え、将来にわたる活躍できる人材の育成に寄与する。</li> </ul>

管理・運営体制  
 拠点全体の統括や連携企画等の立案・運営・広報等を実施する企画運営部門を設置します。  
 また、関係法令等に基づき3施設のコア業務を実施する専門職員や事務職員を適切に配置します。

008

**利用促進**

県立施設として、年齢や居住地、障害の有無等にかかわらず、全ての県民が利用しやすい仕組みを整えます。

また、利用者数の拡大を図ることで、利用者数の増加を目指すとともに、県外からの観光客やインバウンドの利用も促進していきます。

遠隔利用、広域利用の促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>デジタルアーカイブ、デジタルミュージアム、電子書籍等の活用</li> <li>市町立施設等と連携した施設連携等の実施 等</li> </ul>
若年層の利用促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育機関との連携、学校団体の受入れ</li> <li>子ども・子育て世代が利用しやすい環境の整備</li> <li>若者が興味・関心を抱く企画等の実施 等</li> </ul>
県外からの利用促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>とちぎならではの魅力的な企画等の実施</li> <li>展示解説等での多言語対応の 等</li> </ul>

**VI 事業計画**

問題に向け、事業推進体制を整備するとともに、施設整備計画や管理・運営計画、事業手法について、詳細に検討していきます。

また、より多くの県民に興味・関心を持ってもらうため、検討状況等について、広く情報発信していきます。

整備全体のスケジュールは、現時点では以下のとおり想定しています。

計画・設計 (3～5年) → 工事 (3～4年) → 開館準備 (毎年～1年)

編集発行 / 橋本真  
 〒320-8501 栃木県宇都宮市南町1-20 総合情報発信センター  
 TEL: 028-623-2209 FAX: 028-623-2210  
[https://www.pref.tochigi.lg.jp/01/mta\\_saiho/mta\\_portal.html](https://www.pref.tochigi.lg.jp/01/mta_saiho/mta_portal.html)

009